

日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要 - 現代と文化』  
第 113 号 2006 年 3 月

## くらしの安全・安心？

--- 文学はそれをどう扱ってきたか ---

江 坂 哲 也

はじめに

「安全」であると、「安心」して暮らしていた私たちを突然襲う災難を目の前にして、これまでの日常の生活がいかに危険と背中合わせであったことかと思ひ知らされる。そういう色々な事故や事件を毎日新聞やテレビが報道しているが、最近のもので私の目を剥いたものに、4月25日JR西日本の宝塚線で起こった脱線事故がある。報道によれば、運転士が遅れを取り戻すため制限時速70キロをはるかに越えた115キロのスピードでカーブに突っ込んだという<sup>1</sup>。この無謀にも驚かされたが、その奥に隠されていた事情を知るにつれ、あきれ果て、開いた口がふさがらなかった。列車をダイヤどおりに運行できなかった原因を解明するのではなく、その責任を運転士個人に押し付け、ほとんど恫喝といじめとしか言いようのない行為が教育の名の下で公然と行われ<sup>2</sup>、そのため既にこの事故の前に自殺者が出ていたという。その両親が裁判に訴えていたため<sup>3</sup>、マスコミがそこから背後の事情を察知し、その点が追及され、報道につながったのだろうが、それがなかったら、運転士の個人的責任とATSの設置という矮小化された問題でこの事件は終わっていたかもしれない。そして依然として危険をはらんだまま、目先の利益追求という一つの物差だけで列車運行のダイヤが組まれ、その運連席に人間が張りつけられるという状況が続いたかも知れない。

では、ダイヤが少し余裕のあるものに緩められ、ATSも取り付けられたから、安全になったと言えるだろうか。それは取りあえずの最小限の物理的安全策が取られただけで、重要なのはJRの全職員がこの事故をどれだけ深く掘り下げ、教訓にできるか、そしてどう変わるかにすべてが掛かっていると言えよう。過ちを犯すことのある人間の弱点を補完し、「安全」を保障するのは前者のような物理的なものであるが、その人間関係を含めた職場環境が変わらなければ、同じようにアモク<sup>4</sup>に罹ったように死へと突っ走る犠牲者を出してしまう恐れが残り、決して「安心」できないだろう。この点をわざわざ強調するのは、上からの管理が強化され、本来有機的に組織されるべき色々な部門や個々人が孤立して、機械の歯車のようにバラバラに動かされている

状況があり、その弱い環で精神的病いやドロップ・アウト、さらには過労死や自殺までもが、日本中で見られるからである。そして、まさにあの事故の際に JR 職員の取った行動の中にも、それが顕在していた。

それについての報道によると、「他区間の事故だから」と、ボーリング大会とそれに続く宴会を計画どおり実行したグループがあったというが<sup>5</sup>、彼らは自分たちの会社が大惨事を招いたのを知り、自分たちの持ち場にも同じような問題が潜んでいるのではと考えなかったのだろうか。停止線を越えたオーバー・ラン、ダイヤどおりに運行できない実態は他の区間になかったのだろうか。そして極めつけは、あの列車に乗り合わせていたにもかかわらず、現場を徒歩で離れ、職場に向かった二人の職員がいたという<sup>6</sup>。文学はこういうものをどう扱ってきたか、その例をイギリス留学のお土産として近藤さんから聞いたジョークで見てみよう。

船が遭難してしまい、船長は子供と女性を優先的に救命ボートに乗せようとして、男性の乗客をこう説得した。

アメリカ人には「ヒーローは皆そうします」と言うと、納得して、そうしてくれた。

イギリス人には「紳士は皆さん、そうなさいます」

日本人には「皆さんは、そうなさっています」

このジョークは「ヒーロー」とか「紳士」という理想像のない日本人をターゲットにしたものである。もちろん、この状況と JR 事故後のそれとは違う。前者では、浸水という危険を前にして、助ける乗客の優先順位は決定済みで、問題は男性の乗客にその協力をどう呼びかけるかである。後者の状況では、重傷を負った人を幸い無傷または軽いもので済んだ人たちで助けることが重要で、実際に事故直後、乗客同士でその助け合いが始まり、近所の人々は救援に駆けつけたという。「皆さんはそう」しているのに、あの二人はしなかった。そこで、経済学部教授だった高木さんから聞いたジョークを紹介しよう。

船が遭難した。ドイツ人は傾きかけた船から海に飛び込んで、漂流している木々などを集めていかだを作り、皆で陸があるであろう方向に漕ぎだした。

イタリア人は船上に集まり、皆で熱心にお祈りを始めた。

日本人はケイタイを取り出して、東京の本社にお伺いを立て出した。

このジョークを地で行ったのがあの二人で、その上司までもが「持ち場に着いて、仕事の開始まで待機するように」と指示し、さらなる落ちを作ってしまった。自分たちの会社が事故を起こし、多くの乗客が苦しんでいる、さらに自分たちの仲間であるその列車の運転士や車掌もその中にいるはずである。そういう彼らを見捨てて、規則に従って動くことしかできなかった機械の歯車のような人間、そしてダイヤに無理があることは明白であったのに、それに合わせることで、

またはそれに合わせたかのように虚偽報告することで、自己の人間性を機械の付属品の段階にまで貶めざるをえない職場環境、これらは日常どこでも見受けられるものではないだろうか。

こういう日常の現実から虚構の世界へと誘い込み、これまでの自分の実生活に違った視点から光を当ててくれるものに芸術がある。そこではこの「安全」と「安心」の問題がどのように扱われているか、それをここで見てみたい。

## 「安全」と「安心」の意味

私はドイツ文学の関係者であるため、ここで扱う文献はそれに限ることとして、まずこの項ではこの二つの言葉の意味を和独の両語から考えてみたい。

日本語ではこのどちらの語にも同じ「安」という字があるが、漢和辞典によれば、これは家を表す「ウ」かんむりの下に「女」がいることを表し、「女が家の中にいて守っていれば家内が安らかに治まる」<sup>7</sup>の意とある。男は外に出て、田で力を出しているのだろう。もちろん女性は家で昼寝をしていたわけではなく、掃除・洗濯などの家事と共に子供や老人の世話という保育・福祉活動を営んでいたのであるが、男が従事する農業を産業基盤としていた時代に作られた文字、これが「安」であろう。これは資本主義下の現代では、家の中にいるのは女ではなく、金となるのだろうか。ところで誰がその金を守るのか。「安全」のため、キィでも掛けておくのか。ところでこの「安」と、完全の意を表す「全」が熟語になると、「やすらか、あぶなくない、危険がない」という意味で、その出典として挙げられている後漢書、夏恭伝の用例では「擁兵固守、獨安全」（兵を擁して固く守っている、獨の国は安全である）とある<sup>8</sup>。すると、「安全」という語は他国からの侵略という「危険」から守ることと捉えられ、もともと国家・政治的な言葉であったことが分かる。

この「安全」という熟語は、ドイツ語では「ジッヒャーハイト」(Sicherheit)という一つの名詞で表され、その動詞は「ジッヘルン」(sichern)、形容詞と副詞は「ジッヒャー」(sicher)である。中国の出典で挙げられた国家的「安全」という点で、この言葉が日独の両国でどのように使われているかを見てみよう。ドイツ統一で有名になったドイツ民主共和国 (Deutsche Demokratische Republik, 略称 DDR, 日本での呼称は「東ドイツ」) の諜報機関、シュタージ (Stasi) は略称で、正しくはシュターツジッヒャーハイツディーンスト (Staatssicherheitsdienst) という名称で、「国家」(Staat) の「安全」(Sicherheit) を任務とする「省」(Dienst) であった。

日本語で「安全」という語を冠し、国家的なものを表す具体的なものは「安全」保障条約で、これをドイツ語に直すと Sicherheitsvertrag (Vertrag は「条約」) となる。さらに国連の「安全」保障理事会 (略して「安保理」) という名称が示すように、外国との関係ではこの「安全」という言葉が和訳として使われるが、国内的には「保安」とか「公安」という言葉が使われるようである。この「保安」の例では『広辞苑』に「保安警察」という見出しで、「他の行政に関連

なく、一般に社会公共の安寧・秩序を維持するための警察語。風俗警察・集会警察・危険物警察など」とあり、さらに 1887 年に自由民権運動を弾圧するために制定された「保安条例」、現在の自衛隊の前身であった「保安隊」、陸と海上の警備を統括する「保安庁」などがある。「公安」の例では有斐閣の『六法全書』の国家行政組織法には、法務省のもとに公安審査委員会、その下に公安調査庁がある。

あの東の諜報機関に対抗したのがドイツ連邦共和国 (Bundesrepublik Deutschland, 日本での呼称は「西ドイツ」) のブンデス・ナーハリヒテンディーンスト (Bundesnachrichtendienst) であるが、この名称には「安全」(Sicherheit) という言葉はなく、「連邦」(ブント, Bund) つまり国家を守るため、「情報」(ナーハリヒテン, Nachrichten) を蒐集したり、流したり、操作したりする「部局」(ディーンスト, Dienst) で、東と同じ任務を持っている。興味深いことに、このナーハリヒテンというドイツ語には「知らせ、ニュース」の意味もある。もちろん各国の民主主義の発達段階によって程度の差はあれ、国家の「安全」のため、個人的な「知らせ」を運ぶ手紙や電話から、テレビや新聞の「ニュース」までも扱うのがそういう部局の仕事ということになる。つまり親書の検閲または盗読、電話の盗聴などによって個人の頭の中をのぞき、マスコミにあるニュースを流したり、流させなかったりして、大衆の頭を操作することが主であって、スパイ映画の主人公が負う任務などはほんの一部か、単なる作り物に過ぎない。日本ではこの「情報」という言葉を冠した官吏として、内閣情報官が置かれ、「重要政策に関する情報の収集調査に関する事務」<sup>9</sup> を執っている。

こうして見ると、私たちが暮らしでよく耳目にする交通「安全」(Verkehrssicherheit, Verkehr は「交通」)、「安全」弁 (Sicherheitsventil, Ventil は「弁」) などと共に、普通知らずにいる国家体制維持のためのスパイや、戦争に備えた国際条約などで同じ語が使われていることに気づかされる。そして「安全」という言葉がわざわざ強調されている所は正に「危険」と隣り合わせであるということ、このことも改めて考えておく必要がある。工場などで「安全第一」という標語がある所、そして道路に設けられている「安全地帯」がその良い例であろう。

以上で「安全」については、中国語から取り入れられた「安」という元の意味を除けば、和独両語ともほぼ同じ意味で使われている、そう考えて良いだろう。

問題は「安心」である。これを先ほどの国語辞典で引くと、「気にかかることがなく、またはなくて、心が安らかなこと。物事が安全・完全で、人に不安を感じさせないこと」と、終止符で二つの意味に分けられている。前者は心情的意味だけであるが、後者は前述の「安全」が人に感じられたときの心情という意味に解され、「安全」と「安心」が因果関係にあることを示していよう。あの「安」の字源から考えると、「家に妻がいる」というのが「安全」で、その客観的原因が主観的・情緒的「安心」という結果を生み、田で「心おきなく」力を振るえるという心境であろう。「安全」が国家から個人のレベルまでも含む客観的・物理的なものであるのに対して、「安心」は個人的なもので、主観的・情緒的であるといえよう。

ところでこの「安心」には、仏教語では「あんじん」と読み、「仏に帰依して心に疑いをもた

ない」意と説明があり、さらに「安心立命」という熟語が紹介され、それには「天命を知って心を安らかにし、くだらない事に心を動かさないこと」という説明、そして仏教語としては「あんじんりゅうめい」と読むとある。こうして見ると、どうもこの「安心」という語は仏教に起源があるようだ。生きている人間にとって最大の関心事は死であって、科学、特に医学が未発達だった時代では、「風邪は万病の元」という言葉があったように、ちょっとした怪我や病気で死に至る。さらに伝染病などがいったん発生してしまうと、その死神から逃げるか、または患者を隔離し、死体を埋めるか、焼却する以外それを防ぐ手段はほとんどなかった。そのため日常的に直面せざるをえない死の不安を解消するためには、仏の助けを借りるか、天命を知ることが必要だったのだろう。ところで、最近は核家族化によりお爺さん・お婆さんとは縁遠くなり、地域社会の付き合いも希薄になり、近所の葬式もせいぜい義理だけの列席という塩梅で、老いとか死というものを意識させてくれる機会も減り、「安心」をその意味で使うことも少なくなった。しかし、時には一度しかない人生の「安心」の意味を考え、動物のように単に生きるのではない、人間らしい「生きがいとは何か」と、自省してみるのも必要ではないだろうか。特に今回のあのような事故を見ると、機械の部品としてではなく、人間として働くことの意味として、考え直してみる価値があるように思われる。

社会に潜む危険は言葉にも反映され、人間的・個性的な温かみのあるものが減り、上から与えられた機械的なものが幅をきかせている。買い物をして、レストランで食事をして、どの店員からも変な決まり文句で対応され、そして最後にレジで「千円からお預かりします」とやられると、突然「安心」の境地から追い出され、「これが人間の話す言葉か」と腹立たしくなる、これは私だけであろうか。

この日本語の「安心」の境地をドイツ語ではどう表すのだろうか。和独辞典<sup>10</sup>を引くと、色々な単語や表現で例示してあるところを見ると、この編者も独訳に困ったのだろう。例えば、日本語で「彼女は安心している」のドイツ語訳は »Sie hat keine Sorgen« (彼女は不安 >Sorgen< を持っていない) と、次に「病人はもう安心です」は »Der Kranke ist außer Gefahr« (その病人は危機 >Gefahr< を脱している) となっている。この後者のドイツ文を逆に自然な日本語に直せば、「病人は峠を越えました」となるであろう。もちろんこれを直訳的に再びドイツ語に直したら、怪訝な顔で「いや、病人はずっとベットの中にいた」と応じられるであろう。それ故この辞書の編者のように、同じような状況でドイツ人はどう表現するのだろうか、と考えなければならない。

この辞書にある他の用例を見てみよう。「私は安心する」という日本語をドイツ文にするため、beruhigen という動詞を主語と同じ目的語を取る再帰形で使い、 »Ich beruhige mich« (私は私自身を落ち着かせる) という表現にしている。また、「私は安心している」を »Ich bin erleichtert« (私は軽くさせられている) と、動詞 erleichtern を状態受動で使っている。このようにドイツ語には、日本語の「人が安心する」という表現法はなく、上述の例のように再帰形で、または受動を表す過去分詞でしか表されない。これが日本語とドイツ語の大きな違いである、



これをここで押さえておきたい。

ところで、その二つの動詞の元になっている語は下線部の *ruhig* (静かな) と *leicht* (軽い) という形容詞で、再帰形で「そういう状態に自分をする」、または「そうされている」という受身形で、日本語の「安心する」ということになる。しかし後者の *erleichtern* は精神的な意味を含むにしても、元来は重荷などの物理的な重量から解放されて「安心」するのであって、ここで扱う電車に乗り込むときの「安心」とは違う。*beruhigen* も『ヴァーリッヒ』(Wahrig)<sup>1)</sup>では、  
 »Ich habe das Kind nur mit Mühe beruhigen können« (私は苦勞してようやく子どもを静かにさせることができた) という用例が紹介されているが、これなども目を覚ましたら母親がいないのに気づいて泣きやまない子どもを、「おかあさんは坊やのそばにいるから、安心してね」と、なだめすかして、泣き止ませ、静かにする、そういう意味の「安心」である。ちなみに、おなかですいて泣いている子どもを静かにさせる時の動詞は *stillen* で、これも下線部の「静かな」という形容詞の状態にするのだが、「授乳する」という意味で、生理的不足(不完全)の状態にある赤子を満足(完全に)させ、静かにさせることである。

この *beruhigen* が日本語の「安心」と同じように使われる例を強いて挙げるとすれば、こういう状況になろう。受話器から「あなたのお子さんが交通事故に遭いました」という声を聞いた母親はびっくりして、最悪の事態を想像するだろうが、続いて「乗っていた自転車が壊れただけで、ちょっとしたかすり傷だけで済みました」という知らせで、静かな気持ちにさせられる。こういう状況が、この動詞の共有できる「安心」である。こういう場合、日本人の母親なら「それを聞いて、安心しましたわ」と言い、ドイツ人の »Das hat mich beruhigt« (それは私を平静にした) という表現と全く同じになろう。日本人ならそんな漢語を使わずに、もっと感情がこもった普通の言い回しで「ホッとしましたわ」と言うだろう。これはそれを聞く前に想像した地獄のような情景がスーッと消え、そこから解放され、ホッと出る息の音を表している。こういう場合に限って日独のその両語はほぼ一致するが、日本語の「安心」は仏教語から派生したことが示すように、もっと広く深い意味を持っているように思われる。

そのため「あなたの車なら、わたし安心して乗れるわ」という場合を考えてみよう。この「安心」は彼の運転を「信頼」している気持ちを表している。ドイツ語ではそういう場合、まさにその「信頼」に当たる »*Vertrauen*« を使う。例えば「お前が作ったものなら、無限の信頼を寄せて、なんでも食べるよ」(*Ich esse alles in unendlichem Vertrauen, was du gekocht hast*) と言うが、これまで検討してきたような「安心」に該当する語は使わない。逆にこれを日本語に直訳して、「信頼」とか「信用」という言葉を使うと、「腹の底では逆のことを考えているのでは」と勘ぐられる恐れがある。それゆえ日本語の「安心」には、それ以前のもの、そしてドイツ語の人間に対する「信頼」だけではない、もっと大きなものが含まれているように感じられる。例えば「ここなら安心して暮らせるわ」という場合、「隣近所の人とは良さそうだ」という人間に対する「信頼」だけではなく、病院、学校、そして買い物をするためのマーケットという周囲の安全で便利な生活環境、風水害などにも安全な地理的条件など周りのすべてに対する「安心」である。

この言葉はそれらすべてのものに包まれ、保護されているような気持ちであり、さらに大きな仏の功德を得た安心立命という主観的な悟りの境地までも含んでいるように思える。では、こういう「安心」に当たるドイツ語は何になるのだろうか。

### 「旅人の夜歌」と「賽の河原地蔵和讃」

前述した形容詞の »ruhig« (静かな) と同系語の自動詞の »ruhen« (休息する), 名詞の »Ruh (e)« (休息, 静けさ) を使い, 前述の日本語の「安心」に近い境地を表していると思われるゲーテ (J. W. Goethe 1749-1832) の「旅人の夜の歌」(Wandrer's Nachtlid 1780) をここで見てみよう。詩は音声と切り離せず, しかもこれは8詩行の短いものであるため, まず原文で<sup>12</sup>, その下に拙訳で紹介しよう。アラビア数字は便宜上で第5詩行を, 原詩行の小文字のアルファベットは, 下線部の脚韻形式を表す。

Über allen <u>Gipfeln</u>	a
Ist <u>Ruh</u> ,	b
In allen <u>Wipfeln</u>	a
Spürest du	b
Kaum einen <u>Hauch</u> ;	5 c
Die Vögelein schweigen im <u>Walde</u> .	d
Warte nur, <u>balde</u>	d
Ruhest du <u>auch</u> .	c

峰みねを  
包む静寂,  
木々の梢に  
お前が感ずる  
息吹ほぼなく, 5  
鳥たちも黙して, 静かな森。  
まあ, 待て, まもなく  
お前も憩うのだ。

この有名な詩は音韻論的にも詳しい色々な注釈を受け, 様々に論じられてきたが<sup>13</sup>, ここでは私が味わった情緒の世界を紹介するに止めたい。この静かな自然界の描写の中で, 第2と4詩行が鈍い音「ウー」で脚韻を踏んでいるため, »Ruh, du!« 「休め, おまえ」と呼びかけられているようにも聞こえる。エリザベス・M・ウィルキンソンは第6詩行が2つの名詞のe音の繰り返し

しにより「快適な調子で歌う子守唄」<sup>14</sup>になっていると賞しているが、内容的にはこの詩行だけでなく、ここまでの全詩行が子どもを抱いている母のような山という大自然が提供する「静寂」(Ruh)を表している。それが最終詩行ではっきりと「お前は憩うのだ」(Ruhst du)となる。第6詩行はヴァルデ(Walde, 森)で終止符が打たれているが、その脚韻が次詩行のバルデ(balde, まもなく)のアルデと重なっている。それどころか、その間にある「ヴァルテ」(Warte, 待て)も含めると、この3語の »Walde, Warte, balde« が類似音で重ねられていることに気づかされる。第5詩行の「ハオホ」(Hauch, 息吹)と最終詩行の「アオホ」(auch, 「も」)が脚韻を踏んでいるが、その「ハオホ」の意味が「息吹」であるため、「アオホ」が吐く息の音「ホッ」に聞こえないだろうか。山が天と接するところを静寂が覆い、木々の梢には人間の耳に聞こえる風の息吹もほとんどなく、小鳥たちも森の中でさえずりを止めている。このように山の上から下へと描写されてきた静かな森の中、そこから聞こえて来るあの3語の類似音、これは何か。葉が擦れ合うカサカサ、サラサラという音、しかもそれは役目を終えて落ちていく枯葉がたてる音なのか、神の声なのだろうか。それが「まあ、待て、まもなく、お前も憩うのだ」と、息吹を「ホッ」と掛けて、この詩は終わっている。

日本では寺の山門で仁王や狛犬が対で据えられている。一方は口を開けて、生まれて最初に空気を吸う「ア」の形を表し、他方はそれを閉じて、死ぬ際に最後の吐息を出す「ウン」の形を表すと言われている。この「ア」と「ウン」の間、人間は一度だけ人生という旅をする。あのゲーテの詩はまさに「旅人の夜の歌」と題されているが、最初の自然(神)という大きな「静寂」(Ruh)の懷に包まれている状態から「憩」(Ruhe)の状態、つまり死ななければならない人間というものの運(ウン)命に「ハッ」と気づかされたこと、その激しい気持ちの変化がここには歌いこまれている。この詩の前半、すなわち山の中で「静寂」(Ruh)に包まれている「旅人」の心情、これが日本語の安心立命の境地に近いと言えないだろうか。

日本の水稲作の青々とした田んぼの面を風が穏やかにサワサワと、または強くサーッと撫でて行くのを太陽の下で見ていた私の自然体験と、ドイツの友人がこう語ってくれたものとはどうも違うようだ。「少年のころ夜の山の中で、ひとりで座っているのが好きだった。その静寂の中で木々の葉が擦れ合う音を聞いていると、自然と心が静かになっていった」。これが樹齢何百年の大木に囲まれた山、その静寂の中で聞こえて来る葉が擦れ合い、落ちる音、これがドイツ人のそしてゲーテの「まもなく、お前も憩うのだ」という心の故郷なのだろう。

もちろん私はこの »Ruh, Ruhe, ruhen« という語が「安心」に当たると強弁しているのではない。そうではなく、あの「旅人」の第6詩行までの境地こそ、まさに大きなものに包まれ守られているという「安」らかな「心」の状態で、そういう気持ちにさせる「静寂」(Ruh)の世界を提供してくれる「山」(Berg)、これが日本語の「安心」に繋がるのである。こう書くと、「何を、馬鹿な」と思われるだろうが、それを文化的・語源的に証明したい。その前に、このゲーテの詩の世界に似た「安心」の状況を表している日本のものを一緒に見ていただきたい。

それは私が子供のころ毎晩仏壇の前で聞かされていたお経の世界である。日本では子どもが親



より先に死ぬのは最大の親不孝であるためか、その子は成仏するために越えなければならない三途の川を渡ることが許されない。そのため子どもは、その賽の河原で石を拾い「ひとつ積んでは父のため、ふたつ積んでは母のため、みつ積んでは兄弟のため」<sup>15</sup>と供養をしている。すると、そこに鬼が現れて、その子が心をこめて積んだ石の塔を金棒で壊し、その童子をいじめる。子どもはまた「ひとつ積んでは父のため、……」と始めるが、ふたたび鬼が現れて、いじめを繰り返す。その時お地蔵さんが現れて、自分の衣でその子を包み隠し、鬼から守ってくれる。確かそういう内容の経で、幼くして弟を失った私にとって非常に感動的なもので、「どうか、お地蔵様、可哀想な弟を守ってください」という気持ちになった。ところで、ここで重要なのは私のそういう気持ちではなく、お地蔵さんの衣に包み隠され、鬼から守られている子どもの心境である。まさにこれが「安心」（あんじん）で、そして自然（神）という大きく「安全」な山（Berg）が醸し出す「静寂」に包み「隠」（bergen）され、守られているという旅人ゲートの心境である。この彼は自分が「永遠の憩い」（Ruhe）に移行せざるを得ない、そういう生きている存在であることを突然気づかされ、「安心」の境地から追い出され、むせび泣くことになる。それゆえ彼にとって、そこに行き着くまでの「まもなく」（balde）が重要になるのであるが、これについては最後の項で扱う『ファウスト』まで、お待ちいただきたい。

ところで、このドイツ語の動詞 bergen（ベルゲン）は「悪いこと」を「隠す」ではなく、「安全の中にもたらす」（in Sicherheit bringen）<sup>16</sup>で、これが本来の意味である。この bergen は他動詞であるため、その過去分詞 geborgen は受身の意味を持ち、「安全の中にもたらされている」と主語が情緒的に感じることで、日本語の「安心」の意味になろう。とにかくドイツ人はこの語を、前出の「軽くさせられている 安心」（erleichtert）と違って、情緒的なものと感じる。それゆえ「ぼくは安心だ」のドイツ文は »Ich bin geborgen« となろう<sup>17</sup>。

この「包み守る」（bergen, ベルゲン）と「山」（Berg, ベルク）はアップラウト<sup>18</sup>という母音交替の関係にあり、それゆえ同じ語源であることを示しているが、»Burg«（ブルク, 山城）という語もそうである。「山」も木々が危険な敵から自分たちの姿を包み隠してくれるが、この「山城」は山の上にあり、「逃げ込む城の役を果たす、守り固められた高地」<sup>19</sup>という意味で、それゆえ「安全」な所となる。以上で »bergen«（berg が語幹で、-en は語尾であることに注意）、»Berg«, »Burg« の 3 語は母音交替の関係にある同系語で、意味の上でも深い関係にある。

ここで少し余談になるが、日本人が誤解している「市民」の本来の意味について書いておきたい。「市民」のドイツ語は »Bürger« であるが、これはまさにあの「山城」（Burg）から派生した語「城の人」（ビュルガー）で、これまで述べてきた本来の意味から解すれば、自分たちの「安全」を提供してくれるその中に入り、共に敵と戦う「仲間」となろう。これが高い山から平地に下り、その居住する場所を「壁」で囲んで「安全」にする「町」（Stadt）づくりとして受け継がれ、さらに規模がもっと大きくなった「国」（Staat）を守るため、国境を「壁」で囲む<sup>20</sup>までになっても、その同じところに住む「仲間」の名詞「ビュルガー」はそのまま受け継がれてきた。すると敵から攻撃されたとき、「山城」（Burg）という「安全」地帯に逃げ込む同じ「仲

間」が有する「権利」(Recht)が「市民権」(Bürgerrecht)で、その同じ「仲間」同士の「戦い」(Krieg)が「市民戦争」(Bürgerkrieg)、つまり仲間割れとか内戦となる。

閑話休題。前述したように、ドイツ語では「主語が安心する」という表現ができないので、他動詞 »bergen« が »geborgen« と過去分詞化することによって受動とその後の状態を表し、「安全の中に入れられた状態で、そう感じさせられている」ということで、日本語の「安心」となる。もちろん、それには「信用」や「信頼」の意味も含まれる。グリム兄弟 (Wilhelm Grimm 1786-1859, Jakob Grimm 1785-1863) の辞書では、この語の用例として次のビュルガー (G. A. Burger 1747-94) の詩を挙げているが<sup>21</sup>、これは日本の「賽の河原のお地藏さま」のような宗教的な感じも含んでいる。

Da ruh du, mein armes, da ruh nun in gott,

geborgen auf immer vor elend und spott.

(さあ、お休み、わたしの可哀想な子よ、神に抱かれて、

さあ、お休み、悲惨と嘲笑から、永久に守られて.)

ところで、この »geborgen« と同じように宗教的なものを含むものに「救う」(retten)がある。もちろん、この「救い」を「安心」と強弁するつもりは毛頭ない。しかし「安全」だと「安心」していたところを危険が襲い、そこから再び「安全」にもたらされた時に感ずるのが「安心」であるならば、その危険や不安から「救」われることも同じ構造で、情緒的には同じ結果をもたらすであろう。さらにこの「救う」という言葉は和独ともに、物理的な危険からそうするだけでなく、宗教的な意味も含んでいる。ドイツ語ではゲーテの『ファウスト』第一部の最後がそれである。グレートヘンは教会による祝福のない行為で身ごもり、さらに産まれたその赤子を殺してしまい、その罪で牢獄に入れられ、処刑の朝を迎えようとしている。そこにファウストが悪魔メフィストを供に連れ、彼女を脱獄させようとやってくるが、彼女はそれを拒む。朝が訪れ、彼ら二人は彼女の救出をあきらめ、逃げ出す。その時メフィストが「あの女は裁かれたのだ」(gerichtet)と叫ぶと、天上から「救われたのだ」(gerettet)と、声が聞こえてくる。地上の教会の裁きとは違い、人間らしく懸命に生き、それゆえに犯してしまった自らの罪を心から悔いたグレートヘンを神は救ったのだらう。それゆえ »geborgen« と共に、この »retten« の過去分詞 »gerettet« と、名詞 »Rettung« も考慮しながら、論を進めたい。

### 「安全」について、3つの言葉

暮らしの中で個々人はいつも同じことが繰り返されると思い込んで生活をしている。つまり今日も「安全」であると、「安心」しているわけである。文学は実はそうではないということ、またはそうであってはいけないと知らせるため、それが描く虚構の世界では全く逆のこと、つまり

災難や災害が襲いかかり、事件や事故が起こり、それに対して恐怖や憎悪が胸のうちに沸き起こり、その葛藤が終幕の解決に向かって展開する。それゆえ、この論文の表題には疑問符を付けた。しかし少し考えてみれば、現実の社会もそうではないか。新聞紙上を賑わすさまざまな事件や事故は私たちの日々の暮らしにも可能性として存在しているのに、私とは無縁の世界だと「安心」している、または「私の子どもはかすり傷で済んだ」と、「ホッ」と息をついている。これはこれで大切な気分で、逆にあれこれと心配し出したら、自分の仕事に手がつかなくなり、天が落ちてくるのではないかという杞憂に陥ったり、あるいはショックなことで心に受けたトラウマ (Trauma, ギリシア語で「傷」) に悩み続けることになる。あの JR の事故で肉親や友人を失った人たち、そこから救助 (in Sicherheit bringen) された乗客の多くにはトラウマが残り、宝塚線を利用できなくなった、またはあの事故現場にさしかかると、あの光景が蘇り、心臓の鼓動が早くなるという。JR はその事故で「信頼」(Vertrauen) を失い、目先の営利を求めるあまり、企業としての経営に赤信号がともり、「安心」できない状況になってしまった。トラウマは克服し、「信頼」は取り戻さなければならないが、単なる忘却に努めるとか、「人の噂も 75 日」と、時の経過を耐えて待つのでは何の解決にもならず、あの犠牲を無にするようなものであろう。ましてや言い訳に終始したり、責任を他に転嫁し、自分だけが安全圏に逃げ込もうとするなどは論外である。

そうしないために文学は警告している。例えば、フェルディナント・ゲオルク・ユンガー (Ferdinand Georg Jünger 1898-1977) は「安全」について、こう言っている。

あらゆることから安全になろうとする者は監獄を増やす。

Wer sich gegen alles sichern will, vermehrt die Gefängnisse.

あの中国の杞の人を庶民の心配症の代表とすれば、この人は為政者のそれであろう。自分を襲ってきたテロリストを監獄にぶち込み、危険性のある者たちからも安全になろうとすれば、この言葉のようにするしかないであろう。それでも心配だから、ボディ・ガードを付ける。究極の安全を求めるならば、すべての監獄を開放し、自分がそこに入るしかない。しかし困ったことに、自由は失われる。自由と安全は究極的には矛盾する。

ここでスイスの物語作家、抒情詩人ローベルト・ヴァルザー (Robert Walser 1878-1956) の「安全」についての言葉を見てみよう。

ぼくらの安全を硬質にはしてはいけない、さもないと折れる。

Unsere Sicherheiten dürfen nichts Starres werden, sonst brechen sie.

夜でも安全にしようと、都会では街頭をつけた。しかし、それで満天の星を失った。犯罪が行われたなら、犯人を確実に捕らえようと監視カメラをつけた。そして見事捕らえた。住民は「我々

の安全は守られる」と拍手喝采。そこでの犯行はなくなるだろうが、場所を移す。そして、そこにもあそこにもとイタチごっこが始まり、ある日、警察官がニヤリと笑った。強力な自然に呼ばれ、用を足した所にもそれがあったのだ。何から何まで監視されていたのだ。そこで住民は「我々の自由は失われた、監獄に入っているようだ」と叫ぶ。「安全」のための監視と処罰が極限に達すれば、警察国家に対して反乱や革命が起ころう。つまり硬直の結果、折れることになる。

最後にミュンヘンのコメディアンで作家でもあったカール・ヴァレンティン (Karl Valentin 1882-1948) に「安全」または「確実」について語ってもらおう。

確かなのは、確かなもの (安全) はない、ということだ。

Sicher ist, daß nichts sicher ist.

この訳が示すように、ドイツ語の「安全」(sicher) という形容詞には「確かな」という意味もある。この一文だけを訳すなら、下線部はもちろん同じ訳語「確かな」で統一しなければならぬ。

以上が「安全」についての、文学に携わる者の答である。日常の安全はいつも危険との緊張関係の中で維持され、流動的である。それを完全なものにしようとする、皮肉なことに逆のものに転化してしまう。あの鉄道事故にしても、JR という会社が競争に打ち勝ち、生き残るため、つまり「安全」のために利益を優先させ、列車運行のダイヤをぎりぎりの「硬い」ものにしてしまった。しかし晴天と雨天ではレールと車輪の摩擦は異なり、乗客の多少によって乗り降りにかかる時間が違うだけでなく、列車の総重量も変わってくる。そのためスピッドの調節は難しく、ブレーキの掛け時と強度も微妙に違ってくる。それができるのは経験を積み、職人芸の域に達したベテランに限られよう。しかし国鉄の民営化とリストラにより、そういうマイスターも排除していたため、職員には経験の浅い若年層が多く、いびつな年齢構成となっていた。それを補う「教育」は監獄のようなもので、二度とそこには入りたくないというトラウマを植えつけ、さらに自殺者までも出していた。そして、硬質化したダイヤは4月25日、あのような最悪の折れ方をした。

## マンの『鉄道事故』

ここでは、トーマス・マン (Thomas Mann 1875-1955) の『鉄道事故』(Eisenbahnunglück 1907) で、日常の「安全」と「安心」の問題がどう扱われているかを見てみよう。この短編小説は彼の体験談という枠組みで、その椿事を素材にしながら、作家の鋭い観察眼で生きている個人または集団を、さらに秩序の象徴である国家とその権力者を描き出している。彼は既に長編の『ブッデンブロッグ家の人々』(Buddenbrooks 1901)、そして中編の『トーニオ・クレーガァ』(Tonio Kröger 1903) を世に送り出し、作家としての地位を既に確立している時期にこれを書

いている。それゆえ講演とか朗読会などへの依頼が多々あったのであろう。この小説はそういう旅行のための準備から始まっている。彼はトランクに草稿やノートなどを詰め、ミュンヘンから目的地ドレスデンに向かう「安全」切符を確保し、「安心」した。その原文と拙訳はこうである。

Ich benützte also den Schlafwagen, hatte mir tags zuvor ein Abteil erster Klasse gesichert und war geborgen.<sup>22</sup>

(私はそれで寝台車を利用することにして、前日に一等の車室を確保し、安心しました.)

下線部の »gesichert« は形容詞 »sicher« (安全な、確実な) の動詞 »sichern« (安全にする、確実にする、確保する) の過去分詞で、マンは寝台車のコンパートメントを必ず利用できるよう「安全」にし、それで彼は「安心」(geborgen) したのである。この原文の時制を現在に直せば、前々項で述べたように »Ich bin geborgen« (ぼくは安心) となる。マンはこの乗車券という客観的・物理的な「安全」を確保し、主観的・情緒的に「安心」して、翌日の旅行にそなえて安眠できることになる<sup>23</sup>。

「ドレスデン行きの夜行列車は習慣的に (gewohnheitsmäßig) 毎晩ミュンヘンの中央駅から出発し、翌朝にはドレスデンにいる、このことを私は十分承知している。しかし私自身がそれを利用し、自分の重要な運命をそれに結びつけるとなると、これはまさに大ごと (eine große Sache) ですよ」<sup>24</sup>。当時はヴィルヘルム二世 (Wilhelm 1888-1918 在位) 統治下にあり、その夜行列車はドイツ帝国鉄道のもので、その利用者である国民にとっては、これまで規則正しく運行されてきたという実績が「信頼」になり、秩序になり、それが空気のように普通であり、昨日のように今日も繰り返される「習慣」(Gewohnheit) となっていた。しかし個人が国家に運命を託すということは「大ごと」だと、マンには感じられた。

翌日彼は大きなトランクにてこずりながら駅に着き、それを荷物として預け、最後に「自分自身を収納し (mich untergebracht)」、自分が「安全の中に」(in Sicherheit) いることを知る<sup>25</sup>。ここを小説として訳す場合は「列車に乗り込み、ホッと息をつく」とすべき箇所であるが、このようにほとんど直訳に近いものにしたのは、マンが作家として同語反復を繰り返さず、さらに文脈の流れを乱さないように、どれほど気づかっているかを明らかにする趣旨からである。注意深い原文の読者なら、前に引用した「一等の車室を確保し (gesichert)、安心 (geborgen) した」と同じことが、言葉を替えて表現されていること、そして荷物の委託に続いて、皮肉をこめて自分の身を「収納」するという言葉が使われていることに気づかれるだろう。この動詞の不定詞は »unterbringen« で、これは「物がある物の中に収める」という動詞で、それをここで使うことによって「自分自身」を物扱いにし、そしてその「収納」先は明示されていないが、もちろん列車という名の国家である。この国家にとって、乗客も一種の荷物であるが、マンにとって自分の身体は厄介な荷物で、それを一等の寝台車に預けることで、彼の精神は解放され、「ホッ」と



する。こういう気持ちは大切であり、さもないと次の段階に進めないと、私は前述しておいた。マンはそれで「安心」して、通路の窓から外の出来事を観察できることになる。そして新聞・お茶売りの音楽的な声、別れを惜しむ情景などを楽しんでいると、二人の駅員が大きな荷車を荷物専用の貨車の方に押して行く様子が、彼の目に入ってくる。彼は自分の預けたトランクがそこに積み込まれているのを確認して、「心配ない、確かな手中に (in guten Händen) あるのだ」<sup>26</sup>と安心する。二人の駅員の手 (Hand) は4本だから、その複数形の »Hände« が »in« (中) という前置詞に支配されて3格 »Händen« の形で使われていると考え、その文をそう理解するのは、それはそれで全く正しい。しかし、この「手」に関しては、例えば »die öffentliche (公の) Hände« で、法的には企業体としての国家、地方公共団体の意になるので、これも「国家の手中にあるのだからと安心した」と読めよう。そして、「ご覧なさい、こちらの車掌を。この男は革帯を左肩から斜めに掛け、立派な口髭を蓄え、眼差しは冷たく見張っている。ご覧、擦り切れた黒のマントに身を包んだお婆ちゃんを彼が怒鳴りつけている様を。お婆ちゃんは寸でのことで二等車に乗り込んでしまうところだったのだ。これが国家 (Staat) だ、私たちの父で、権威で安全 (Sicherheit) なのだ。皆はこいつと関わりあうことを嫌がる。こいつは厳格で、乱暴でさえあるが、信頼 (Verlaß), そう、信頼でき、そしてお前のトランクはこいつに持ち上げられ、アブラハムの膝 (Schoß) に抱かれているようだ」<sup>27</sup>。この「持ち上げられ」という表現には »aufgehoben« という過去分詞が使われているが、これもあの »geborgen« と同じく、「安全の中にもたらされている」ことを表し、そしてここに初めてはっきりとした「国家」という言葉が出てくる。「擦り切れた」衣装からすぐ貧乏人であることが分かる、このお婆ちゃんを3等または4等車に追いやるといふ「乱暴」なことを国家はやるが、秩序を保ち一等車の客の快適な旅を守ってくれ、さらに旧約聖書に出てくるユダヤ人の族長 (Stammvater, Vater は「父」) アブラハム (Abraham) のように、彼のトランクを膝の上に抱き上げ、保護してくれ、「信頼」できるものである。この「国家」に皮肉と恐れを多少込めながらも、そのように「安全」を維持し、「安心」させてくれるものと定義している。もちろんその機能を果たしているのは駅員たちの制服と制帽であり、この車掌の口髭とあの冷たい眼差しがその本質の現れである。このユニフォームがなくなり、またはそれを身に着けているのを忘れ、彼らが人間的になってしまう瞬間に遭遇することなど知らず、国家という列車はミュンヘン中央駅で出発を待っている。

車窓からマンが外を見続けていると、ゲートル (Gamasche) を巻いた男が高価な犬を連れ、悠々とプラットフォームを歩いてくる。「ゲートル」という訳語では、軍人を連想させ誤解を招くので、今後原文のフランス語にならって「ガマッシュ」とするが、これは当時の上流階級が身につけていた非常に高価なものである。この紳士は「最上級貴族の出身であることは確かで、(中略——引用者、以下同じ) 彼がああ恐ろしいような車掌に何か質問をすると、車掌は自分が誰と係わっているかをはっきり感じたらしく、答えながら帽子に手をやった。紳士は自分という人となりを与えた影響に満足した様子で、再び歩き出した。彼はガマッシュに守られ悠然と (sicher) <sup>28</sup> 歩いてゆく。彼の顔つきは冷酷そうで、人も物も刺すような目で捉ええた。(中略)



彼は外でも家にいるかのように振舞い、制度 (Einrichtungen) や権力 (Gewalten) に物怖じ一つ見せず、彼そのものがこの権力の一員で、一言でいえば、主人 (Herr) なのだ」<sup>29</sup>。「制度」と訳した »Einrichtugnen« は、社会生活がスムーズに営まれるための色々な決まりごとのことで、例えば「テロにどう対処するか、介護をどう保障するか」という国家的レベルの「制度」から、「乗車前には切符を買い、車掌が回ってきたら、それを見せること」、さらに「寝台車に犬などは連れ込まないこと」、そういう当たり前なこともそれに入る。それを保障するために設けられ、その違反者に罰則を行使するものが「権力」(Gewalt) である。»Herr« という語も訳しづらく、「紳士、主人、神」まで含んでいる。この語は淑女や下々の者に対しては「紳士」、奴隷や召使に対しては「主人」、人間を含めた被造物に対しては「神」となる。マンがここで使っている »Herr« を一応「主人」と訳したが、この紳士の本質が小説の中で次第に明らかになって行く。

発車時間となり、このガマッシュの紳士も同じ列車に乗り込み、マンの車室と隣り合わせになる。この夜行列車は走りだし、検札が始まる。この車掌は礼儀正しいが、職務上の口調でそれを済ますと、人間らしい「お休みなさい」という挨拶もせず、マンの車室を出て行く。この車掌は次に隣のコンパートメントをノックし、同じ職務を果たすことになるのだが、そのドアを開ければ、連れ込みが禁止されているあの犬を目にすることになる。マンはそこで起こるすべての事態をまず耳にし、そして目にすることになる。「何だ」という大声に続いて、「うるさい、引っ込め、猿チン (Affenschwanz)」<sup>30</sup> という怒鳴り声が、マンの耳に飛び込んでくる。

この言葉に驚いて、マンが自分のコンパートメントから出てみると、少し開いているドアの隙間から、その車室の中が見えた。「切符の束がこの車掌の顔めがけて飛んできて、(中略) その角が彼の目に当たり、(中略) 彼は涙を流しながらも、気をつけの姿勢をして、礼を言い、帽子に手を掛ける」<sup>31</sup>。まさに脱帽という哀れな車掌の姿を目にし、マンは仰天する。この車掌も国家の一員であるが、その上で「制度」とか規則を作る、または作らせる側のこの主人は、それに縛られず、全く自由である。マンは隣の騒動から「国家」、そしてその「制度」と「権力」の秘密を、このような具体的な形で知ってしまった。この車掌は、ドアをノックして入るなり、「猿チン」呼ばわりされ、「切符を拝見させていただきます」といえば、切符を投げつけられ、それが目に当たり、その落ちてくる切符の束を両手で受け止め、目の痛さに涙を流しながらも、両脚を揃え、気をつけの姿勢でお礼を言い、国家権力の象徴である制帽を脱ぐ。ここでマンは書いていないが、この車掌はあの罵声ですぐに自分が目の前にしている人種を知り、あのように屈辱的に検察だけを済ませて、連れのお犬様の件には目をつぶったのであろう。

こうして隣の密室でひと騒動が終わり、それとは無縁の乗客もあのお隣さんもすべて寝静まり、その後しばらく本を読んでいたマンも彼らの仲間に入ろうと、その準備を始めた夜中のその瞬間に、鉄道事故が起こった。これまで「安全」だと「信頼」を寄せていた国家という夜行列車が脱線したのだ。

列車は猛スピードでガタガタ走り続け、そして停止した。車内では女性の甲高い悲鳴に男性の狼狽した声が交ざり合っている。隣の車室から、あのガマッシュを巻いていた紳士の、「猿チン」

と車掌を罵ったあの権力者の「助けてくれ」という声が聞こえたと思うや、その当人がパジャマ姿で通路に走り出て来た。すでに集まっていた乗客たちがそこにいるのだが、彼にはそれが全く目に入らないらしく、うつろな眼差しで突っ立ち、哀願するように「ああ、神さま」(Lieber Gott) と言った。突然みずからを助けようと思ひ立ったらしく、彼は壁にはめ込まれている小棚に向かい、拳骨でガラスを割って、救急用の斧と鋸を取り出そうするが、それはすぐには割れない。すると次に、彼はそこに集まっていた乗客たちを荒々しく肩で突きつけ、のけられた半裸の女性たちの金切り声などにはお構いなしで、道を切り開き、車外へと飛んで行った<sup>32</sup>。このガマッシュの男もあの JR の運転手と同じアモク症に罹ったようである。

その暴走者が去っても、車内はもちろん混乱の渦の中にある。そこようやくあの車掌が赤い目をして現れた。乗客たちは彼に救いを求めるが、その彼は「脱線です」と説明するぐらいで、全くの役立たず。検察後マンに「お休みなさい」という人間らしい挨拶さえしなかったこの車掌が、この事故で急に多弁になり、家を出るとき自分の奥さんと交わした私的な会話を乗客に語りだし、「わたしゃ、言ったんですよ、『なあ、お前、何か今日起こりそうな気がするんだ』とね」<sup>33</sup>。国家に命じられたことしか言えなかったあの車掌が、このように人間らしくなったのは良いが、これでは国民である乗客の要求に応えることができない。

頼れる人がいない乗客たちは自力で線路に降り、肩を寄せ合いながら集まって、この事故の共同体験者ということで急に親しくなり、その輪では色々な情報が交換され、広まっていく。そのようにして明らかになったことはこうである。ポイントの不具合で、この夜行列車はスピードを落とさずに、本来の線路ではない急カーブの軌道に突っ込んでしまったため脱線し、そのまま走り続け、前で停車していた貨物列車に衝突してし、7 万マルクの機関車は真二つに折れてしまったが、死傷者はいないようだ。レアリストのマンはそれに続けて、「老女が救出された」という話もあるが、「その彼女を見たものは誰もいない」<sup>34</sup>と、流言飛語の怪しさを付け加えることも忘れていない。

この事故が起こったのは小さな駅のすぐ手前で、その駅長が脱線・転覆している列車の前から走ってきた。彼は急いで飛び出して来たためか、頭には制帽が載っていない。彼は大声で、泣き出しそうな声で、そこに集まっていた乗客に色々命令するが、「帽子も落ち着き (Haltung) もなしでは、誰も聞く耳を持たない」<sup>35</sup>。前出の車掌は普通の人間になって役立たず、この駅長は服装と声が普通の人間になってしまったため、乗客は誰も彼の命令に従わない。この彼を見て、マンはこう続けている。「気の毒な男だ。きっと責任を取らされるだろう。恐らく彼の人生行路 (Laufbahn) は終わりで、彼の人生 (Leben) は破壊されて (zerstört) しまった」<sup>36</sup>。もちろん引用中の下線部は、この小説のタイトルにある「鉄道」(Eisenbahn) と掛けられている。あのポイントの管理者である駅長はその故障の責任を取られ、事故を起こした「鉄道」と同じように、自分の「行路」(Bahn) を走り (laufen) 続けることができず、国家公務員として鉄のように強く確かであった彼の「人生」もこの「鉄道事故」で破壊されてしまった。原文ではこのように掛詞が随所で使われ、わずか数行の短文に深みを与えている。

次に登場する公務員は「国家であり、私たちの父」である立派な髭のあの車掌で、彼はびっこを引きながらやって来る。彼は自分の膝を手で押さえ、この自分の膝だけが心配なようである。「一体なにが起きたんですか」、これが彼の開口一番の台詞で、次にこれまで車内に閉じ込められていた自分の状況を語り、最後に「屋根をつたって逃亡 (entkommen) して来たんです」と言った。これを新聞が聞きつけてしまい、「普通 (in der Regel) 絶対使わないこの『逃亡』という言葉のために、彼は自分の膝の不幸 (Unglück) 以上にその事故 (Unglück) の新聞報道で打撃を受けてしまった」<sup>37</sup>。下線部の「普通」と訳した »Regel« も掛詞である。これはもともと「規則」の意味で、「規則」正しく繰り返されていれば、その状況が「普通」となる。「普通」なら、彼は「規則」の中で禁止されている行為にあたる、その言葉を使わなかったのだが、事故という「普通」ではない状況の中で、「国家」であり、厳格な「父」であったこの車掌も「普通」の「おとうさん」になってしまい、「規則」違反が問われる「逃亡」という言葉を、彼はつい漏らしてしまった。軍隊で言えば敵前「逃亡」罪に当たり、膝の痛みなど問題外ということであろう。

とにかくこの「普通」人になってしまった車掌に、自分が預けたトランクのことを尋ねても仕方がないと、マンが諦めかけているところに、それが載せられた貨車の方から若者がやって来た。消防隊が到着したらしく、彼はその若い隊員だった。この彼をつかまえて、貨車の様子を訊いてみても、「そりゃ、ねえ、どんな状況が誰にも分かりませんよ。もう無茶苦茶で、女の靴が……」<sup>38</sup>と、彼が見てきたのはそれだけのように、「女の靴が……」を繰り返すだけである。脱線転覆した夜行列車が片方のレールをふさいで止まっているため、後続の列車がそれに衝突する恐れがあるということで、あの若い隊員も最後尾の列車に派遣され、近づいて来る後続列車の気配は全く感じられないのに、彼はそこで松明を盛んに振っている<sup>39</sup>。こういう無益な労働と、それに気づかず一所懸命命令どおりやっている若者の姿を、マンは淡々と描き出している。ところで、日本のあの事故で発覚した地獄の「日勤教育」はどうだろうか。無益どころか、迷惑を通り越して、あの事故の遠因を作ったといえる代物ではなかったか。

ドイツ帝国の鉄道事故現場に戻ろう。車掌と駅長に消防隊長が加わり、状況をはっきり認識し合い、それぞれの任務を果たすべきであった。しかし「国家という厳父」の車掌は普通の「おとうさん」、あわてて飛び出して来たあの駅長の頭には国家を表す「帽子」が載っていない、消防隊は無闇に松明を振っている。

「そして、次第に秩序 (Ordnung) のようなものが芽生えだし、国家である私たちの父は冷静さと名望 (Ansehen) を取り戻してゆく」<sup>40</sup>。乗客はその駅に収容され、代わりの列車が来るまで待たされ、切符の種類に関係なくそれに乗り込むことになる。つまり全くの自由ということで、これまで一等車に無縁であった多くの人々が殺到したため、皮肉なことにそこは二等車両より混雑することになる。マンがそこに狭い空間を見つけ、座ろうとした瞬間、横から彼を押しつけ、その座を占めた者がいた。あのガマッシュの男である。彼は犬を連れていなかった。犬は隔離されて、「主人の特権 (Herrenrechte) に反して、機関車のすぐ後ろにある薄暗い地下牢 (Verlies)

に座り (sitzt), 伏えている。この紳士も黄色の切符を持っているが, そんなものは何の役にも立たず, 彼は不平を鳴らし, 不幸な尊厳 (Majestät) のために, この共産主義 (Kommunismus) とこの大平均化に反抗しようと試みる。すると, ある男が実直な声で, 『あんたさんは座れた (sitzen) だけでも, 喜ばなくっちゃ』と, 彼をたしなめる。それで, この紳士は苦笑いし, このとんでもない状況に身を任せるのだった<sup>41</sup>。

前述したように, 法を制定する権力者ほど法に縛られないが, それは衆目から隠されたあの一等車においてのみ可能であった。その特権を行使してもらえなくなった犬が座っている場所を, マンは「地下牢」と書いている。これはオランダから入ってきた言葉で, 元来「損失 (Verlust)」, 「自分自身を失うこと」という意味であったが, そこから「人が自分自身を失う地下の空間」, 「地下牢」と使われるようになった。この犬が「座っている (sitzt)」と「あんたさんは座っている (sitzen)」はもちろん呼応している。この動詞はあの前者のように座っている場所の明示がなくても, ドイツ語では「監獄に入っている」という意味にもなるため, 犬だけでなく, その飼い主であるこのガマッシュの男もそうになっていることになる。確かにそうであろう。牢に入っている者は肩をすぼめ, 両脚を抱え, うなだれ, まさに茫然自失の状態である。満員の列車で立っている人に済まなさそうに座っている姿がそれである。しかしこの男はこの座っている姿勢とは逆で, 「済まなさそう」な気持ちなど, はなから持ち合わせていない。彼は両側の乗客の肩に邪魔され, 肩を怒らすこともできず, 前に立っている人の足にも邪魔され, 自分の脚を伸ばすこともできず, 陛下 (Majestät) に近い身分の自分がこのような状況に陥っていることに我慢できない。それで彼は, 一等の黄色い乗車券が陥っている不幸な「尊厳」(Majestät) を回復しようとしたのだろう。

これをマンは「共産主義」に対する反抗と表現している。このドイツ語の »Kommunismus« はラテン語の »communis« に由来し, その意味は「みな同じ, (ドイツ語の gemeinsam)」である。フランス語の »commune« もこれと同系・同義で, 歴史的フランス革命の「パリ・コミューン」(Commune de Paris) は聖職者と貴族の支配制度を廃し, 「みな同じ」という「平等」(égalité) を実現しようとしたものであった。原文のそういう意味での「共産主義」は次の言葉の「平均化」につながっている。マンはこれに「大」きなという形容詞をつけ, さらに陛下 (Majestät) も臣下もない, このような状況を「とんでもない」と形容している。

では, このように大袈裟ともいえる表現で描かれている, ガマッシュの男の行為がどんなものであったか, これはもうお分かりであろう。彼は自分が「地下牢に閉じ込められている」ように感じ, 「俺は黄色の乗車券を持っているのに……」とブツブツつぶやき, 隣の人の肩や腕を押し, 前に立っている人の足を押しのけようとしたのであろう。そして彼はあのよう, 人民の代表ともいえる男にバイエルン方言で注意されてしまった。マンはあの車掌を, これまで紹介したように, 「国家」と呼んでいたが, 本当の国家の「主人」はこの我が儘で, 利己的で, 傍若無人なガマッシュの男である。国家に見立てた鉄道, これが事故で以前のように機能しなくなったこの瞬間を捉え, このちょっとした光景をあのよう表現することで, マンは垣間見せた国家の本質を

見事に描写したと言えよう。

この紳士と対照的な人物が最後に登場する。二等車に乗ろうとして、あの髭の車掌に三か四等に追いやられた、あの貧乏なお婆ちゃんがそれである。お婆ちゃんは消防隊員に両側から抱えられるようにして乗り込んで来て、目の前の状況に驚き「これは本当に一等車ですか」と何回も聞き返す。人がそうだと教えてやり、席を空けてやる。それで、「ありがたや（Gottlob）と腰を下ろしたお婆ちゃんの様子は、まるで今ようやく救われたかのようにであった」<sup>42</sup>。あのガマッシュの男は、前述したように、困ったとき神に助けを要求するが、このお婆ちゃんのように「Gottlob」（神が賛美されんことを）と感謝はしない。事故直後のこの男は他人を押しつけて、自分だけ逃げ出し、そして今回はマンを押しつけて、席を奪い、それでも満足せず、自分の特権を要求する。このお婆ちゃんは初めて乗せてもらった一等車の光景が自分の乗っていた三・四等車と同じか、またはそれ以上の混みようで驚くが、それでも腰を降ろせただけで満足し、神にお礼を言う。前者は不満タラタラで地下牢に座っているように感じ、後者は神の膝の上で抱かれているように、「安心」の境地に遊んでいる。

マンの小説の主要部分はここで終わっている。私なりにその後の事態を素描すれば、こうなるう。マンも暗示していたように、この事故で「国家」の責任者たちはそれぞれ処分されたであろう。そして、ヴィルヘルム二世の帝国鉄道（Reichsbahn）は再び走り出したが、第一次世界大戦中の1917年には単なる主義ではない実際の共産主義を目指す社会主義国家がロシアで成立し、1918年には、あのガマッシュの男のように、ドイツ皇帝自身が国外に逃亡した。1919年には、当時最も民主的といわれた憲法を持つヴァイマル共和国（die Weimarer Republik -1933）が成立し、その10年後の1929年マンはノーベル賞作者となった。この年の10月ニューヨークの株式市場の大暴落で世界恐慌が始まり、それが終わった1933年にドイツではヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）が政権の座に着き、ヴァイマルの共和制は終わる。ナチスに反対していたマンは1934年亡命せざるをえなくなり、アメリカに渡った。その後さまざまな「国家」がどのような運命をたどったか、これ以降の素描はもう不要であろう。

マンの『鉄道事故』の約100年後に、日本であるJR事故が起こった。運転士の弱点を補い、自動的に列車を止めるATSの設置、これをこの国家は義務付けていなかった、このことがマス・コミによって追求された。そして、それが付けられて終わったようであるが、そもそもこの事故以前にどうしてそうしていなかったのだろうか。さらに問題はATSだけで良いのであろうか。ガマッシュを剥ぎ取り、絹のパジャマ姿でお婆ちゃんと同じ車両に座らせるというノーベル賞級の「とんでもない」報道は望めないにしても、もう少し暗部を暴いてもらいたい<sup>43</sup>。これが多くの犠牲者に報い、今後の「安全」と「安心」に繋がるのではないだろうか。

マンの『鉄道事故』の紹介で、あの「国家」という夜行列車を操縦していた運転士については意図的に省いてきた。これをここで付け加え、この章を終えよう。マンが自分の預けたトランクの安否を訊ねても、埒が明かなかったことは先述した。結局彼は自分の脚でそれを確かめに行き、安心して戻り、再び群集の仲間入りをすると、噂が飛び交っていた。「運転士はしっかりした行



動をとり、最後の瞬間に緊急ブレーキをかけ、大事故になるのを防いだ、そこまでは確かなようだ。(中略) 賞賛に値する運転士だ。彼の姿は見えないし、彼を見たものは誰もいない。しかし、その名声は列車づたいに広がって行き、私たちは居ない彼を褒めた。ある紳士が両手を広げて、夜空のどこかに向けて、高く上げ、『その男が我々みんなを救ったのだ (der Mann hat uns alle gerettet)』と言うと、皆がみなそれに肯いた<sup>44</sup>。線路に下り、群れている乗客は、この時点で自分たちが「救われた」ことを確認し合っている。そして先述したように、最後にあのお婆ちゃんが「救われ」、「ホッ」とする。救いようのないのは一人だけ、あのガマッシュの男である。それはともかくとして、私がこの引用文を順不同にして、わざわざ最後に持ってきたのには二つの理由がある。この作品のマンは皮肉家でアウトサイダーを気取る作家で、それにより徹底的なりアリストぶりを発揮し、英雄伝説が生まれる現場をこのわずかな数行で見事に描き出している。これを一つ強調したかったからである。次に、マンはこのある紳士が言ったこの言葉 »der Mann hat uns alle gerettet« を、それ以前によく承知していたはずである。これを指摘して、次章の「ジョン・メイナード」に繋げるため最後にした、これが第二の理由である。

### ジョン・メイナード

これはフォンターネ (Theodor Fontane 1819-1898) が 1885 年に発表したバラードのタイトルで、アメリカの五大湖の一つで実際に起きた客船の火災事故をモデルにしたものである。ここに、『鉄道事故』のあの言葉が出てくる。この詩は『ドイツ詩集』が編まれると、必ず掲載されるほど有名なもので、もちろんマンもこの詩を味わっていたはずである。まず、それを拙訳で紹介しよう<sup>45</sup>。

ジョン・メイナード！

「ジョン・メイナードって、誰？」

「ジョン・メイナードは、私たちの船の舵取り、  
岸につける最後まで、がんばってくれた。

私たちを救ってくれた、君の頭にのせよう、

私たちのために亡くなった、お礼にみんなの愛の冠を、

ジョン・メイナード」

＊

「つばめ」はエリー湖上を飛んでいく、  
ゴウゴウと舳先に泡立つ波、白雪がごとく舞い、



デトロイトからバッファローに向けて船は飛ぶ —— 10

みんなの心、こころ晴ればれ、こころウキウキ、  
乗客には女、子どもも混じり、  
薄明かりに目を凝らし、岸をながめ、  
おしゃべりしながら、ジョン・メイナードを見かけると、  
みんながみな、「舵取りさん、後どれほど？」 15  
前方に目を、次に左右を見回して、  
「あと 30 分、半時間ってとこだ」。

みんなの心ハレバレ、みんなの心ウキウキ  
そこに突然、船室から響く悲鳴一つ、  
「火事だ！」、確かにそう聞こえた。 20  
キャビンから煙が、ハッチからモウモウと  
黒煙が、つづいて赤い炎がメラメラと、  
まだ 20 分も、バッファローまで。

船上は乗客で、ごちゃゴチャ  
船首へと押しあい、へしあい 25  
船首の先には、まだ空気と光が、  
舵のところは、黒煙がびっしり、  
悲嘆の声ますます大きく、「俺たちどこに、今どこだ？」  
まだ 15 分も、バッファローまで。

突風おこれど、黒煙、雲がごとくビッシリと、 30  
舵の方に目をこらし、うかがえど、  
もはや舵手の姿は見えず、  
船長はメガホンを手に、大声で、  
「まだ居るか、ジョン・メイナード？」

「おう、船長、おるぞ」  
「浜に乗り上げろ、磯に突っ込め！」 35  
「そいつに向かって、がんばるぞ」  
乗客はみんな歓声を上げ、「ガンバレ —— よう！」  
まだ 10 分も、バッファローまで。

「まだ居るか、ジョン・メイナード？」。応答の声は

息たえダエに、「おう、セン長、ガンバル……」  
と、岩がゴツゴツ、石がゴロゴロの磯の中に、  
そのどまん中に、「つばめ」を駆りたて、  
助けかろうとすれば、そうするしかない、突っ込め！  
助かった、バッフアローの浜だ！

＊

船は裂け、火はおさまるも、くすぶっている。  
みんな助かったのだ。ひとりを除いて。

＊

天に向かって、教会やお堂から  
鐘が鳴りだし、カランカランと音を合わせ、  
その音だけが、高く大きく、されど町なかは静か、  
この日、町での営みは、ただ一つ。  
後に従う一万の、いやそれ以上の人ひと  
誰の目にも涙、口には涙のむせび声。

花で敷きつめた、しとねの上に、棺を静かに、  
その上に、みんなで花を投げ入れ、墓を閉じ、  
黄金の文字で、その墓石に  
町中がお礼の言葉を彫りこんだ、  
「ここに眠るはジョン・メイナード、  
炎と煙のなかで、しっかり舵を握りしめ、  
私たちを救ってくれた、きみの頭に載せよう、  
私たちのために亡くなった、お礼にみんなの愛の冠を、  
ジョン・メイナード」

ここで歌われているのは、「安全」だと思って、「安心」して乗り込んだ「つばめ」という名の船上で味わった乗客の恐怖、そして救われたという「安心」である。同時にまた、普通の労働者ジョンが妻に「お前が家を守ってくれるから、俺は安心して働けるよ」と家を出、客船の操舵室に乗り込んだ。そして乗客の「安全」を守るため、立ちこめる黒煙と炎と戦いながら、自分に任かされた舵を最後まで握り続け、その社会的任務を実直に果たし、キリスト教の「安心」立命の

境地へと、「冠」を頭にして、昇って逝ったという事件である。拙訳は少し変えてあるが、第5と58詩行の原文は »er trägt die Kron« (彼は冠をかぶっている) である。その冠はイエズスが人間に神の「愛」を伝えるため、自ら十字架上で犠牲になり、昇天の際にかむった後光の冠と同じであろう。それゆえこの詩行は、ジョン・メイナードが主に召され、「安息」の天国に既に昇ったということを表現している<sup>46</sup>。キリストと同じような犠牲的行為により救われた乗客たちは、彼の「愛」に対する感謝の念をあらわすため、資本主義の賃金という報酬ではなく、自らの「愛」を捧げる。それゆえ、この第6と59詩行も原文では »unsre Liebe sein Lohn« (私たちの愛が彼の報酬) となっている。これらを原文どおり訳さなかったのは、突然「冠」が出てくると、日本人には何のことが分からなくなり、さらに最後が「報酬」で終わっては、少し安っぽい感じになってしまうと懸念したからである。

ところで私はこの項の始めに、フォンターネは史実をもとにこのバラードを創作したと書いた。もちろんそれは、私が利用しているアウフバウ (Aufbau) とハンザー (Hanser) 版の大全集の注に、そう書いてあるからである。ところが、その両版の注で史実が一致しているのは、1841年8月9日バファローを出発し、デトロイトに向かっていた客船エリー (Erie) はアメリカのエリー湖 (Eriesee, See はドイツ語で「湖」) 上で火災を起こしたということ、そして船長の名はティトゥス (Titus)、操舵手の名はルター・フラー (Luther Fuller) という点だけで、それ以外はずいぶん違っている。1978年 (初版は1964年) のハンザー版ではこうなっている。「8時を少し回った晩に火災が起き、船長は操舵手に陸につけるよう命令した。船が沿岸に着く前に操舵室は燃え尽き、249人の乗客が死亡した。操舵手はひどい火傷を負いながら最後に脱出し、その後も存命し、1900年11月22日アルコール患者として、ペンシルバニアの救貧院でジェイムス・ラファティ (James Rafferty) という異名で死んだ」<sup>47</sup>。この全集の初版から25年 (第2版からでは10年) 後の1989年に出版されたアウフバウの全集では、「この船は燃えやすい物質を偶然積み込み、航行の途上で火災事故を起こし、約220名の乗客はパニック状態になり、そのほとんどは火に包まれて死亡、あるいは湖に飛び込んで溺死し、近くの小舟に助けられたのはほんのわずかであった。船長は助かり、操舵手はそのポストに留まり、陸地に最短の航路を取ったが、火に包まれ死亡した」<sup>48</sup>。

このように史実が色々な点で違っているが、最大の相違はバラードの主人公となった操舵手の生死であろう。前者では重い火傷にもかかわらず約60年も生き延びたが、後者ではその事故で死亡したとなっている。どちらが事実であるのか、それとも第三の事実があるのか、それを私はここで問題にするつもりはない。もちろんその事実の一つであるが、それが色々な人の手を経て<sup>49</sup>、フォンターネの手によって初めて感動的で美しいバラードに実り、多くの人に口ずさまれるものになったということ、そしてこの種のジャンルで扱われてきた王侯や歴史的人物に代わって、これまで見向きもされなかった労働者ジョンを彼が歌い上げ、一つの伝説にしたということ、これが重要である。

フォンターネの前時代には、宗教的権威そして偏見や迷妄から人間を解放しようという啓蒙主

義と市民革命があった。それにより人間が家柄とか出身階層とは無関係な個人として見直され、法の前で「自由・平等」な新しい市民（ブルジョワ）として主権者になり、その個々人を「博愛」で結ぶ社会が誕生するはずであった。フォンターネが生きたのは、その夢が破れ、個人的な力ではとても解決できない貧困や疾病、そして犯罪までも生み出す社会というものが発見された時代であった。低賃金と長時間労働のため栄養不足と疲労で病気になり、衣食などを求めて窃盗罪を犯してしまう。児童が安い賃金で働かされ、啓蒙主義が目指した個人的自立のための教養（Bildung）や教育（Erziehung）の機会が奪われてしまう。そういう社会で、「現世や来世での利得を考えず、善を善であるが故になせ」というカント的倫理を説いても、問題の解決にはならないであろう。そういう社会的矛盾から 1848 年フランスでは二月革命が、ドイツではその影響を受け三月革命が勃発し、マルクス（Karl Marx 1818-83）とエンゲルス（Friedrich Engels 1820-95）の『共産党宣言』（Manifest der kommunistischen Partei）が同年出版された。

この社会主義思想が生まれた時代にフォンターネは生き、このバラードで新しい階級としての労働者「ジョン・メイナード」に次の時代を託したと言えよう。彼は全く普通の、あのトーマス・マンの表現を借りれば、ガマッシュの紳士に注意した男のように「実直な」一人の労働者が社会的任務を立派に果たしたことを捉え、文学の力で一つの感動的な伝説を生んだ。この詩の第 5 と 57（拙訳では 58）詩行で繰り返される「彼は私たちを救ってくれた」（Er hat uns gerettet）という詩行が、その 21 年後マンによって、「その男が我々みんなを救ったのだ」（der Mann hat uns alle gerettet）に受け継がれた。前者は次の時代を担う労働者階級に期待を寄せながら、その言葉を英雄伝説的に、後者はそういう伝説が生まれる現場をリアリストの目と耳で冷静に受け止め、少し皮肉な雰囲気をかもし出しながら作品に盛り込んだ、そう言えよう。

ドイツのイエーナ（Jena）でブランド教授（Prof. Helmut Brandt 23. 2. 1928-）とこれらの文学とあの JR 事故の「日勤教育」を話題にしていたとき、同席されていた娘さんに「それは »Strafekurs«（懲罰課程）で、教育ではありませんわ。ドイツ人はそれに対して »Nein«（いいえ）と断りますわ」とやられ、民主主義成熟度の違いを痛感させられた。「No と言える日本」の政治家を選ぶより、「Nein と言える国民」を創る方が、より「安全」で「安心」な日本にできるのではないかと、そしてこれは遠回りに思われるかもしれないが、実はこれこそが近道で本筋ではないかと、そう思われた。

### 『テル』における「安全」と「安心」、そして人間的価値の問題

シラーの作品の中にも読者や観客の心に深く刻まれ、人々の口から口へと伝えられ、そのためにその言葉に翼があるかのように感じられるものが多い。その一つに次のようなものがある。

安全なところからなら、気楽に指図できる。  
(Vom sichern Port läßt sich gemächlich raten.)

この言葉だけを取り出せば、当たり前のことを言っているように思える。あの JR 事故に引きつけて考えれば、「安全な地位にいる上司は、部下に『何がなんでも、ダイヤを守れ』と指図できる」とも解釈できる。上司にそう言って断るのは、もちろん運転士の方で、このように自分の専門職に誇りを持ち、無理な命令を拒否する労働者が誕生していたら、あの事故は起こらなかったであろう。そう解釈できるならば、»Nein« と言える国民を創るためにこの言葉に翼を与え、広めるのも良いだろう。しかし、これはもっと意味深長で、深刻な状況の下で発せられた言葉である。それゆえ、これを元の文脈に戻してみよう。

これは『ヴィルヘルム・テル』(Wilhelm Tell 1804) の第 141 詩行に出てくる。平和なスイスにオーストリアが軍隊を送り込み、占領し、人民に無理難題を強いている。パオムガルテンが森で木を切っているとき、つまり彼の留守中に、侵略軍の城主が突然彼の家に押し入って来て、彼の妻に風呂をわかさせ、無体なことを要求した。彼女は貞操を守るため、夫が木こりの仕事をしている所に助けを求めて、逃げてきた。その彼女を追って来て、己の情欲を満たそうとする城主を彼は斧で打ち殺してしまった。その部下たちが主人の仇を討とうと追って来たため逃げたが、目の前には荒れ狂う湖が、後ろにはその追っ手が迫るといふ切羽つまった状況に彼は陥る。天気が好ければ、その湖面は静かに山と森を鏡のように映しているが、山の天気は変わりやすく、運が悪いことに突然嵐に見舞われ、荒れ狂っている。その湖の向こう岸に渡れば、狼のような兵隊たちから逃れられる。それゆえパオムガルテンは舟頭のルーオディに向こう岸に渡してくれるよう頼みこみ、そこに偶然居合わせた牛飼いのクーオニと獵師のヴェルニも、同国人の彼を侵略者から救ってやってくれと説得している。ところが、その専門職の舟頭はそれまでの経験から、荒れ狂う湖に漕ぎ出すことをためらっている。そこに獵師のテルが弓を手に、やって来る。ルーオディは「テルも權を操れるぞ」と、自分の身の「安全」のために、船頭として負っている社会的責任をかわそうとする。それからの状況は正確を期すため、詩人シラーに力強いヤムプス脚で歌ってもらおう<sup>50</sup>。

テル 事態は生死の境にあるのだ、舟頭さん、思い切ってやってくれ。

(激しく雷が鳴り、湖はさらにゴウゴウと音を立て、荒れ狂う)

ルーオディ 大きく開けた地獄の口に漕ぎ出せと言うのか。

正気なら、誰もそんなことはしないぞ。

テル しっかりした者は自分のことを最後に考えるものだ。

神さまを信じて、困っている人を助けるのだ。

140

ルーオディ 安全なところからなら、気楽に指図できる。

舟はそこにある、湖はあっちだ。やれるものなら、やってみろ。

テル 湖は憐れんでくれるかも知れんが、追っ手の方は無情だ。

やってくれ、舟頭さん。

牛飼いと獵師 そうだ、そうだ、助けてやってくれ。

ルーオディ たとえそれが俺の兄弟や可愛い子どもでも、 145  
 そんなことできないよ。今日はジーマンとユダの日で、  
 だから湖はこんなに荒れ、犠牲を欲しがってるんだ。  
 テル 無駄口を叩いていても、何にもならない。  
 時は迫っている、この男が助かるのは今だけなんだ。  
 さあ舟頭、舟を出すのか、出さないのか。 150  
 ルーオディ いやだよ (Nein)、俺は。  
 テル それじゃあ仕方がない、その小舟をかせ。  
 微力ながら、俺がやってみよう。  
 クーオニ ほう、テルは勇敢だ。  
 ヴェルニ それでこそ獵師というものだ。  
 バオムガルテン テル、お前さんは救いの神で、俺の天使だ。  
 テル 城主の権力からは俺が救い出してやるが、 155  
 嵐という苦境からは他のお方が助けてくださるに違いない。  
 人間の手に落ちるより、神の手に受け止めてもらう、  
 その方がよっぽど増しだ。  
 (羊飼いに) 同郷の人よ、もし俺に  
 何かあった場合は、女房をこう慰めてやってくれ。  
 どうしても放っておけないことを俺はやったのだ、と。 160  
 (テルは小舟に跳びこむ)

あの言葉はこういう状況で発せられたのである。原文の Port を私は「ところ」と訳したが、この語はそもそも「避難所」という意味で、台風などの襲来に備え、漁船などが「安全」を求めて避難してくる所である。ようやく「安全」な舟着場につき、ホッと「安心」しているルーオディに無理難題が押し付けられる。それに対して彼はあの言葉を放ち、次にはっきり »Nein« と言った。彼は最も愛すべき「弟や可愛い子ども」が助けを求めても、それだけではできないと拒否する。彼は自分の「安全」だけを考えている、または弱虫であると非難することは簡単であるが、彼は長年の経験を積み、自然に対する知識を持ち、現在の状況を良く理解している専門家である。それゆえ彼は勇気のないエゴイストであるとか、または逆にテルは無鉄砲な暴虎馮河の類であるとか、そういうことがここで問題になっているのではない。

それを全体のコンテキストから見てみよう。第 152 詩行の「微力ながら、俺がやってみよう」の「微力」は、舟頭のルーオディより獵師のテルの力は劣るという意味ではない。ここでテルと比較されているのは神であり、神の力と較べれば、人間の力には限界があり「弱い」という意味である。第 159 詩行の「何かあった場合」も同様で、原文を直訳すれば「人間的なものがテルに出会う」で、これを分かりやすく説明すれば「テルは自分が神とは違う限界のある人間であるこ



とを思い知らされる」ということで、嵐の猛威に負け、湖底に沈むという意味である。

フォンターネ以前は個人的自立が求められた啓蒙主義の時代であった、そう前述したように、この場でもその時代精神がはっきり歌い込められている。第146詩行で、ルーオディが「ジモンとユダの日」という迷信を持ちだし、舟を出すのを拒む口実にしようとしたのに対して、テルは「無駄口を叩いていても、何にもならない」と応じている。「無駄口を叩いていても」と訳した原文は »mit eitler Rede« で、この形容詞 »eitel« をザンダースは »leer, Nichts enthaltend« (空の、何も含んでいない)<sup>51</sup>と説明していることから明らかなように、テルは迷信を「からっぽで無内容」なものとして、全く信じていない。ルーオディは経験的に自然を熟知していても、キリスト教会が中世に作り出した迷信を信じている、またはそれが世間で通用すると思っている舟頭である。それに対して、テルは迷妄から解放され、科学的精神によって啓蒙された、まさに自立した個人である。啓蒙主義の科学的精神の洗礼を受けた作者シラーは、劇中のテルにそういう自分の分身の役割を担わせ、一人の単なる獵師である彼を理想化していると言えよう。テルにとっての神はルーオディのものとは違って、世俗的教会やその迷信とは全く無縁なもので、自立した個人が目指す倫理的最高目標を測るための物差しと言えよう。

シラーの人間観と美学論は拙論「シラーの抒情詩『影の世界』について」<sup>52</sup>で紹介したように、自然の法則内で自由を楽しんでいるのは「美」(das Schöne)の段階であるが、それが継続できない場面に立たされたとき、人間は自らの「意思」(Wille)で、より高い「崇高」(das Erhabene)の段階へと飛翔しなければならない。これは前述した「善を善であるが故になせ」というカントの定言的命令に通ずるものである。自然的法則内に止まる動物と違って、人間は危険を犯しながらも自由意志で自らの価値を発揮することができる。テルは城主の家来に追われているバウムガルテンを「どうしても放っておけない」と、小舟に乗せて、嵐の湖に漕ぎ出した。ここで彼を助けなかったら、後で悔いが残り、自分自身の倫理的「安心」が脅かされるからであろう。そしてそれをするのは、あくまでも自由意志からであって、強制または命令によってするのも、何かの利得を考えてするのもない、これが重要である。カントを研究したシラーは、彼の哲学を『テル』の中でこのように美しく感動的に具象化したと言えよう。

フォンターネのジョン・メイナードは亡くなったが、シラーのテルは湖底に沈まず、向こう岸に舟をつけ、バウムガルテンだけでなく自分自身の「安心」も救った。さらに彼は自分の子どもの頭上に載せたリングを射させた代官ゲスラーを待ち伏せ、その弓で射殺した。それが発火点となり、自由と独立のため三州が一致団結して戦おうというリュートリ(Rütli)での誓いをスイスの人々は実行に移し、オーストリアが支配のために築いた三つの城を一斉に襲撃し、独立革命を成功に導いた。その成果を自慢しあい、ほめ合いながら、喜びあっている民衆の前に、第5幕第1場でその指導者の一人シュタウファッハーがこう呼びかける<sup>53</sup>。

テルはどこにいる。彼だけがここにいないという法はない。

彼は我々の自由をつくり出した男ではないか。最もつらいこと

に耐え、最も偉大なことをしたのも彼だ。

みんなで行こう、さあ彼の家にそろって行って、

3085

我々みんなの救い主に万歳を唱えよう。

『テル』と「ジョン・メイナード」のそれぞれを、できるだけ生き生きと訳そうとした結果がこれであるが、それでは二つの関係が分からなくなってしまうという欠陥が生じてしまった。それを修正するために、原文に戻って、その直訳を（ ）内に入れ、それぞれの問題箇所を繰り返してみよう。

フォンターネ

Gerettet alle. Nur *einer* fehlt! (助けられた、皆が、一人だけ欠けている.)

45

Er hat uns gerettet, (彼が私たちを救った,)

5, 58

シラー

Soll Er allein uns fehlen? (彼だけが私たちから欠けているべきか)

3082

Dem Retter von uns allen (私たち皆の救い主に)

3086

この原文を見れば、その類似性は一目瞭然であるが、少し説明を加えておこう。フォンターネの詩の第 45 詩行の後半とシラーの第 3082 詩行のどちらにも »fehlen« (欠けている) という動詞 (前者では 3 人称現在の変化形、後者では不定詞) が使われ、さらに前者では »Nur« が、後者では »allein« と、韻を踏むために違う単語が使われているが、意味はどちらも「～だけ」で、同じである。それだけに止まらず、前者では「一人」の »einer« はイタリック体で、後者の「彼」は »Er« と大文字で、同じように強調されている。フォンターネの第 45 詩行の前半は »retten« (救う) の過去分詞が受身として使われ、そしてその救い主はもちろんジョン・メイナードであるから、その意味内容は「彼が皆を救った」と同じで、第 5 と 58 詩行前半の「彼が私たちを救った」と重なる。シラーの第 3086 詩行でも同じ »retten« から作られた名詞 »Retter« (救う人) が使われ、下線で示したように両詩人とも「私たち」(uns)、そして「皆」(alle, allen) と同じ語を使っている。シラーのこの詩行も意味内容は「彼が私たち皆を救った」であり、先述のフォンターネのものとぴったり重なる。

以上で明らかなようにフォンターネは、シラーがスイスの「テル伝説」から創った劇のこの箇所を意識して、「ジョン・メイナード」を新しい伝説にしたのであろう。それぞれの作品では、ジョンは死に、一万以上の人々から涙を、そして花と愛を捧げられ、テルは独立国となったスイスで、「自由な国民として共に生きる」という大団円で幕を閉じる。

## ゲーテが提示した二つのもの

これまで扱ってきた文学作品では、日常生活の「安全」を脅かし、「安心」に替わって不安とか恐怖で心を占拠してしまうものは外部からやってきた。しかしゲーテ (J. W. v. Goethe 1749-1832) の『ファウスト』(Faust 1832) はそれらと異なり、二種類の「安全」と「安心」が提示されている。それを見てみよう。

おしゃべりをしながら散歩に出かける市民たちの台詞に、その一方の「安全」と「安心」が洩らされている。まず、その会話に耳を傾けてみよう<sup>54</sup>。

第2の市民 日曜とか祭日の楽しみで、戦争やその噂を種に 860

おしゃべりすること、これ以上のものはちょっとないですな、  
もっとも遠く離れたトルコあたりで、異民族同士が  
ドンパチってやつでなければ困るがね。

こっちじゃ皆で、飲み屋の窓辺に座り、グラスを飲み干し、  
川を上へ下へと滑っていく色々な船を眺め、 865  
日暮れになったら、いい気分で帰宅の途につきながら、  
この平穏で平和な時代をありがたく思うってやつよ。

第3の市民 そうだよな、お隣さん。俺もそうするぜ。

あいつらは頭の割りっこをしてればいい、  
何もかも無茶苦茶になればいいが、 870  
こっちは昨日のままでなくっちゃな。

この会話の前には最初の市民の台詞があり、そこでは新しい市長が市民に義務や責任を今までより多く課し、さらに税金を上げる政治をやっていると批判されている。それに対してこの二人は他国や他人の不幸を楽しみの種にし、自分たちの「安全」で平和な時代がこのまま続くことを願い、現況に「安心」している。この種のが小市民的な「安全」と「安心」とでも呼べよう。二人は狭い個人的な範囲に留まり、市または国の政治には関心がなく、それが悪化しているのに気づかず、また自分が人間として成長・発展することなど眼中になく、このままの平穏な状態が続くことを願っている。

ところがファウストは「いつか安心して (beruhigt)、安楽椅子に身を横たえるようになったら、おれの人生はもうお終いで良い」(1692-3)<sup>55</sup> という人間である。現状に満足せず、絶えず活動し、自己発展してゆくこと、これが彼の人間としての生のあり方である。では彼が「安心」して、自分の人生に幕を引いても良いと思っている目標、または究極の到達点とは何か。それは「世界を内の奥で統べているものを認識したい、全き作用力と元の素を見てみたい」(382-4)<sup>56</sup> と

いうもので、この劇が舞台となっている中世なら、これは神に迫ろうとするものであり、この詩人の 18・9 世紀なら、世界・宇宙の中心的結節点、そしてギリシア語本来の意味でのアトム (Atom, 「これ以上分けられないもの」) とその作用力を見たいという欲求であろう。現在で言えば宇宙の中心を知り、クオークを自分の目で見たいという欲求とでもなるか。さらにファウスト博士は悪魔メフィストフェレスにこう自分の希望を打ち明ける<sup>57</sup>。

全人類に課せられたものを  
1770  
俺の内なる自我で味わい、  
俺の精神で最高のものと最深のものを掴み、  
人類の幸と不幸を己の一人の胸に詰めこみ、  
そうして俺の自我を人類の自我へと拡張し、  
そして最期には、人類そのもののように、俺も砕け散りたい。 1775

この第 1775 詩行の拙訳は、これまでの訳本にあるものと下線部で違う。例えば大山訳では「ついには人類そのものといっしょに滅びてみよう」<sup>58</sup>となっている。この訳では、ファウストの個人的死と人類の滅亡とが同時であるように解されるが、すると彼は人類滅亡まで生き続ける、または人類を道づれに死のうと考えているのだろうか。高橋のは拙訳と最も近く、「人類同様、己も」となっているが、「人類」の次に「そのもの」がないため、ファウストの死に様が人類の滅び方と同じということになる。そもそも人類が滅ぶとは具体的に何をイメージしているのだろうか。まさかノアの洪水のような終末論をゲーテはここで考えているとは思えない。そのため、まず原文に帰ることにしよう。

Und will, wie sie selbst, am End' auch ich zerscheitern. 1775

人称代名詞 »sie« が指しているのは »die Menschheit« (人類) である。これをグリムは「普遍」と「集合」的概念の 2 つに分けて説明している<sup>59</sup>。先述したように、ここでは後者の集合的な意味での「人類」でないことは確かである。そこで前者の「普遍」的概念の説明をみると、これをまず「人間 (Mensch) という種 (Art), 特性 (Eigenschaft), 本質 (Wesen)」と定義し、これをさらに二つに分け、まず「自分自身の一つの性質 (Natur) によるキリストのこと」と説明し、「彼は天より降り来たりて、人性 (Menschheit) を自らに負われた」という例文を載せている。これはいわゆる「受肉」(Inkarnation) のことで、人間の姿をまとして地上に現れたイエズスのことである。

グリムのもう一つの説明は、「人間のことで、その普遍的な点 (sein Allgemeines) から人間として認識される本質や生 (Leben)」とある。ゲーテがここで使っている「人類」はこの後者のもので<sup>60</sup>、するとこの詩行は、個人としてのファウストとしてではなく、普遍的な「人類その

もの」にまで自己を高め、止揚した者として人生行路を終えたい、そういう意味になろう。ゲーテがこの詩行末で、船が難破する様子を表すのに使われる「砕け散る」という自動詞 »zerscheitern« を選んだのは、死というものを船の航路に突然立ちはだかり、船体を木っ端微塵にしてしまう巨岩のようにイメージしていたからであろう。自然の死とは確かにそのように、願わずしてご破算（破散）となるもので、この「砕け散る」という語は決して、偶然そこに集合していた多くの人々を自爆テロとか特攻で供連れにすること、それを表すものではない。

この詩行訳に残った最大の難所は、そのような普遍的存在となって「俺も」死にたいと言うファウストが念頭においているのは誰か、という問題である。先ほどの »Menschheit« にたいするグリムの説明で気づかれた方もいるだろうが、ファウストがそのような目標にしたのは、地上に下りる際に「人性」という衣をまとった救世主イエズスであろう。彼はその姿で地上に下り、「人類」を教え、救おうと努力し、最期には自ら彼等の罪を背負い、十字架にかけられ、その衣を脱いで昇天した。ファウストは逆に個人（Individuum, 「個別」）から脱皮し、普遍的（allgemein）な「人類そのもの」という衣に包まれて、昇天したいと思っている。これに対してメフィストは「この硬い食べ物を何千年も噛んでいる私の言うことを信じてください。人間が一生かけても、この古いパン種を消化したものは誰一人いませんよ」（1776-9）<sup>61</sup> と応ずる。下線部のこの二つはもちろんあの「人類そのもの」で、個人としての人間で誰もそこまで成長・発展した者はいないということ、悪魔のメフィストはこれまで膨大な数の個々人を噛み砕き、飲みこんできたが、「では、人間とは何か」と考えると、どうも良く分からず、噛み切れず、それゆえ飲み込めないため、今でも噛み続けている。主を前にしてメフィスト・フェレスは、この噛み切れない人間的存在を「この小さな神さまはずっと同じ性質で、最初の日（神が自分の姿に似せて人間アダムを創った日——引用者）と同じように、今も奇妙な」（281-2）<sup>62</sup> と評していたが、それとこの箇所は繋がっていると思われる。悪魔にも分からない「奇妙な」存在で、そのメフィストが今でも飲み込めず噛み続けている、その普遍的「人類そのもの」にまで自己を止揚したい、そしてそれができれば、己の人生行路を終えても良い、そうファウストは思っている。

ゲーテの『ファウスト』の主題はまさにその「人間とは何か」というもので、ファウスト個人はその目標に向かって「過ちを犯しながらも、努力する」<sup>63</sup>。その彼が満足できる段階に達したと思い、その瞬間に向かって「このままでいてくれ、おまえは実にすばらしい」（Verweile doch, du bist so schön! 1700）<sup>64</sup> と言ったとき、メフィストは彼の魂を手に入れ、地獄に連れて行き、そこで彼を使用人として永遠に使うことができる。それまではメフィストの方が彼の家来で、ファウストはこの地上であの「全人類に課せられた」あの両極のものを味わうために、この悪魔の力を自由に利用できる。そういう契約が結ばれ、ファウストは色々無理なことを要求し、メフィストはそれらに対してこれでもか、これでもかと実現してやる、そういう劇が同時代だけに止まらず、舞台をイエズスが肉化する以前の古代ギリシアにまで移して展開する。ファウストはそこで絶世の美女ヘレーネと結婚できても、彼女との間にできた最愛の子どもが亡くなっても、あの契約の言葉を発しない。普通の個人は喜びの絶頂に登れば、このままの状態が続くことを願い、悲

しみのどん底を体験すれば、「もう、これ以上の不幸は沢山だ」と絶望し、活動停止状態になるが、彼は「もう、このままでよい」と言わない。ファウストの魂にとっては悪魔の手はまだ落ちないから「安全」であるだろうが、その持ち主である本人の方は両極の要求がいくら実現されてもまだまだ満足せず、「安心」の境地に至らない。

メフィストの魔術で負け戦の皇帝を助け、勝利に導き、その恩賞として海岸を授けられたファウストは、そこで干拓事業を始める。海岸などもらっても、何の役にも立たないと思われるかも知れないが、そこをすでに訪れていた彼にとっては大きな意味があったのである。打ち寄せる波を見ながら、彼はこう考え、怒りをあらわにした。

海は膨れ、身を高々と盛り上げ、  
急に衰え、大波をドッとふり下ろし、10200  
平らな浜にザザーと押し寄せてくる。  
そいつは俺を不愉快にさせやがった。思い上がりが  
みんなの権利を大切にする自由な精神を、  
激しくおどろたぎった血を通して、  
不愉快な感情に陥れてしまう、その様と同じだ。10205

この前半では押し寄せる海の波の様子が、後半では人間の心の動きが歌われ、ファウストはこの二つの様子を「同じだ」と評している。人間というものは他人に対して「思い上がる」(Übermut) と、それまで皆も同じ「権利」(Rechte) を持っているとして認めていた「自由な精神」(den freien Geist) を、カッカッと頭に上った「血」(Blut) によって、不愉快な「感情」(Gefühl) に陥れてしまう、ゲーテは人間の心の変化を医学的にそう見ていたのであろう。そういう「思い上がり」から支配・被支配の制度が生まれる。さらに隣国との戦争が起こる。王権は神から与えられたもので、自分は特別な者と思っている国王、自分は神から授けられた天国への鍵を持っていると信じ込んでいる法王、規則とか法律は庶民を縛るもので、自分は自由だと傍若無人な振る舞いをするあのガマッシュの男、これらは少しでも思い通りにならないと、「思い上がり」、「不愉快」な気分になる輩である。ところでファウストもメフィストの魔力を利用して、こういう権力者を手玉に取り、さらに彼自身がそう望まなかったにしても、自分の家来の魔術により庶民までもからかったり、うぶな女の子グレートヘンを自由にしてしまったのではないか。それゆえ彼は海の波という鏡に映された自分の醜い姿を見せつけられ、不愉快な気持ちになったのであろう。つまり自分もこいつと同じ「思い上がり」を持っていたことに気づかされたのである。

海の波は自分の力を誇示しながら押し寄せ、返しては、また寄せる、この繰り返しを「何千回」(abertausend, Vers 10211) しても、毎回の「終わり」(Ende, Vers 10212)に残ったものは「不毛」(Unfruchtbarkeit, 「実を結ばないこと」, Vers 10213) でしかなかった。この「何千」と



いう数字は、前述したように、メフィストが普遍的「人類」を嚙んできた「何千」(manche tausende) 年に相応することから、アダムが創造されて以来ずっと人類は「不毛」しか残して来なかったことを示唆していよう<sup>65</sup>。ところで、先ほどの波についての台詞を聞いたメフィストは、「そんなもの何も新しいことではないですな、何十万年も前から (seit hunderttausend Jahren) 私は知っていますよ」(10210-1)<sup>66</sup>と茶化すが、そう言わせたゲーテは人類誕生よりはるか(「何十万年」マイナス「何千年」)前に地球が創造され、陸と海ができていたと考えていたのであろうか、それとも悪魔の単なるたわごととして盛り込んだのだろうか。どちらにしても、これは神による「天地・人間創造説」に反しよう<sup>67</sup>。

閑話休題。ファウストはあの「不毛」な行為を繰り返している波を海のかなたに押しやろうと、干拓事業の計画を練り、その具体的な工事をメフィストに命じてやらせる<sup>68</sup>。そして、完成直前の事業を前にして、こう言う<sup>69</sup>。

俺が何百万もの人に創ってやる新地は、堅固

(sicher, 安全)ではなくとも、働いて自由に住めるものだ。

この地は緑で、実を結んでくれよう (fruchtbar)。人間も家畜も 11565

この新開地にやって来て、すぐ心地よく感じ、

丘の堤防で等しく (gleich) 守られよう。

それを高く築いたのは勇敢で勤勉な集団だ。

この国の内は楽園のようだが、

外では怒濤が荒れ狂い、堤の上をめがけて牙をむき、 11570

侵食し穴を開け、ドッと浸入しようとしても、

その隙間をふさごうと、皆が一緒に (gemein) 駆けつける。

そうだ、こういう意識 (Sinn) に俺はすべてを任せるのだ。

人間英知の究極とは、すなわちこうだ、

自由と生活、これを日々かならず戦いとる者、 11575

この者だけがこれを楽しむにふさわしいと言うことだ。

危険にとり囲まれながら、そのように子どもたち、大人も

老人も、ここでそれぞれしっかりと年をとっていくのだ。

俺はこうした三世代の群れを見ながら、

自由な土地に自由な民と共に留まりたいものだ。 11580

そういう瞬間になら、俺はこう言っても良いだろう、

「このままでいてくれ、お前は実にすばらしい」

俺が地上で送った日々の痕跡はこれで永遠に

滅びるわけではない。――

そんな大きな幸福を予感しながら、 11585

いま俺はこの最高の瞬間を楽しむのだ。

ついにファウストは悪魔メフィストと結んだ契約にある、あの主従関係を逆転させる言葉を発した。彼はこの世での生を終え、魂はメフィストのものとなり、地獄で悪魔の手下として永遠に働くことになる。ところが彼は救われ、天に昇ってゆく。これを神の恩寵とする解釈がある。神は「まもなく彼を清澄 (Klarheit) の中に導いてやるつもりだ」(369)<sup>70</sup> という自分の言葉を守っただけで、メフィスト・フェレスは彼の魂を巡る賭けに神が応じたと、そう思い込んだただだとも解釈できよう。かってファウストに誘惑され、身ごもらされ、うち捨てられ、惑乱状態でその嬰兒を殺してしまい、人間に裁かれ(神に救われ)たグレートヘンが永遠に女性的なものとして、彼を救いに來たのだという解釈もある。私はしかし、ここで「彼の昇天をどう解釈するのか」という問題に係わるつもりはない。ファウストはこれまで「安心」して休むことなく、人生行路を突っ走ってきたが、ここに至ってようやく「このままでいてくれ、お前は実にすばらしい」と禁句を発した。彼がそう言わざるをえないほど美しいこの「お前」、これに私の関心はある。そして、この正体があの普遍的な「人類そのもの」と関係しているように思われる。

これを明らかにするため少し前に戻って、この作品が第一と第二部に分けられている意味を考えてみたい。第一部の牢獄の場で、グレートヘンの悲惨な姿を目にして、そうした自分をファウストは悔やみ、「ああ、俺などは生まれて来なかった方が良かった」(4596)<sup>71</sup> と、自分が誕生した過去を否定できたと呻く。しかし魂を悪魔に渡し、自らの人生を終わりにするあの言葉は発しない<sup>72</sup>。つまり、まだ未来を否定していない。それゆえ第二部へと続き、幕が開き、花咲き乱れる草原の舞台が現れる。そこで彼は疲れ果て、深い眠りに沈もうとするが、あのグレートヘン悲劇の体験で受けた大きなショックのため、それができないらしく、体をゴロゴロ・ピクピクさせながら横たわっている。妖精たちが周りで彼を眠りに誘い、こう歌う、「眠りは皮です、それをお脱ぎなさい」(4661)<sup>73</sup>。妖精アーリエルのこの詩行は彼に脱皮を勧めている。ゲートにとって眠りは過日の疲れをとることより、目覚めるとき古くなったその皮を脱ぎ、新しい人間となって新しい日を迎えることであり、この後者の方が重要だった。これは日々、毎月、毎年とそれぞれの単位で繰り返されるが、この第二部最初の新しい朝は、ファウストをそれまでとは質的に違った新しい人間に生まれ変わらせる。

「生命の脈拍が新しく生き生きと打ち、白んでくる天上に優しく挨拶を送る」(4679-80)<sup>74</sup>。この目覚めて最初に発するこの台詞が、新生したファウストを良く表していよう。しかし第一部で神の域にも迫ろうとした彼とは打って変わり、姿を徐々に現してくる太陽を見て、「残念ながら、まぶしくて、目の痛さに耐えかねて、背を向ける」(4702-3)<sup>75</sup>。すると彼の眼前にはゴウゴウと大量の水を落としている滝が現れる。その水煙に同じ太陽が自らの姿を映している虹を前にして、彼は自らにこう言う。「これを見て、よく考えろ。そうすれば、お前にはもっと良く分かるはずだ。その7色の光でしか、我々は人生の意味を捉えられないのだ」(4726-7)<sup>76</sup>。下線部の「お前」はもちろん個人ファウストであるが、次の「我々」は神にはなれない人間、すなわちあの「人類

そのもの」という普遍的人間である。ここで「太陽」と呼ばれているのは、もちろん神であり、それを直接知り、見ようとしてきたファウストはグレートヘンの悲劇を招いてしまい、そういうこれまでの自分を悔い改めている。以前のように直接太陽を見るのではなく、瀑布に映し出された「7色の虹」を通して、間接的にそれを把握しようとするコペルニクスの転換である。そう視点を变えることによってこそ、以前より「もっと良く分かる」ようになり、所詮人間はそういう方法によってしか自分自身と「人生の意味」を知ることができない。そういう新しい観点で、普遍的な「人類そのもの」の探求が第二部で始まる。ゲーテがそのために設定したのは、先述したように、政治をつかさどる宮廷であり、歴史を古代にまで遡った古代ギリシアという舞台であった。そして現実のドイツに戻り、海岸に打ち寄せ返すという「不毛」な繰り返しを続けている海の波を観察し、その鏡に映った自分たち人間の醜い姿を発見する。

これは天上に神を表敬訪問したメフィストーテレスの人間評価と一致する。彼は人間に「天の光の影」(Schein des Himmelslichts)を与えた神に対して、「人間はそれを理性と名づけ、それを勝手に使い、どんな動物よりもっと動物的にやっていますよ」(285-6)<sup>77</sup>と苦情を言っていた。その最低な行為は戦争であろう。ドイツ皇帝側にファウストはつき、戦勝の恩賞として国の海岸を貰い受け、その干拓工事の完成を前にして、あの先述した独白が始まる。彼がそこに新しい国を創ろうとしたのは、第一部でのグレートヘン悲劇も関係していよう。彼女は教会から神の祝福を受けるという結婚の儀式を経ず、愛するファウストと交わり妊娠し、当惑して、生まれてきた嬰兒を殺してしまった。もちろんファウストにその最大の責任があるが、同時に彼女を当惑させ、そこまで追いつめたのは当時のキリスト教会が定めた儀式と倫理、そしてそれに服従する世間のそういう女に対する仕打ちであった。それゆえ前述したように、生まれ変わったファウストは個人的改悔だけで終わらせることができない。そのためには、個人が問題であった第一部の「ミクロな世界」に対して、政治・宗教などを支配する宮廷世界や、古代にまでさかのぼった歴史という第二部の「マクロな世界」、これをファウストは彷徨しなければならなかったと思われる。そして彼はキリスト教会の古い倫理に対する新しいモラルを発見したとき、新しい国にふさわしくない古い教会を移転させるのだらう<sup>78</sup>。その新しいモラルとは、彼の最後の独白にあった。さらに、新しい国にふさわしい人々はどうあるべきか、これもそこにあった。そして、それこそがファウストに「実にすばらしい」と満足させたあの「お前」であり、彼個人が「人類そのもの」へと自己止揚したことを表していよう。それを見てみよう。

その国は人々を「丘の堤防で等しく (gleich) 守」っているが、同時にその堤は「堅固 (sicher, 安全) ではない」という不完全なもので、常に海からの怒濤に脅かされている。それによって穴が開けられたら、すぐにそれを塞がなければ、生活の「安全」どころか命まで「等しく」失われる。その場合には女と子どもも、そして老人も含めた皆で「一緒に」(gemein) 駆けつけるといふ「意識」(Sinn) で生活しなければならない。これが新しいモラルであって、それ以外は何もない。自らを「完全なる神の意思」の代理人と強弁する教会や君主などもなく、上から押し付けられる倫理もない。自由な民は皆の権利 (Rechte) を尊重する精神の持ち主で、

決して「思い上がり」はしない。ここには、あの小市民根性の持ち主もない。あの二人の市民は他国の戦争を肴に飲み交わし、自分の身近な平和と「安全」をありがたく思いながら、無為という「不毛」を繰り返していた。彼らはさらに新市長の悪政にも気づかない輩であったが、ここでは皆と一緒に穴を塞ぎに駆けつけなければ、自分の「安全」も保てないからである。この新しい国では「一致共同」(gemein)して危険と戦う、まさに「個人は万人のため、万人は個人のため」という自由精神が新しいモラルとなる。そして「緑で、実を結んで」くれる可能性(fruchtbar)のある「この地」をそう(Fruchtbarkeit)するのが、民の「活動的で自由な」(tätig-frei)新しい生活様式と労働である。人間が神のような完全性を直接求めれば、それは「思い上がり」で「不毛」となるが、自分の不完全を自覚し、完全な「安全」ではなく不完全な「安全」という間接的な遠回りの道を選び、人類が「一致共同」すれば、「実りを結ぶ」に違いはない、ファウストが到達した普遍的な「人類そのもの」とはこれであった。

人間英知の究極とは、すなわちこうだ、  
 自由と生活、これを日々かならず戦いとる者、 11575  
 この者だけがこれを楽しむにふさわしいと言うことだ。

この荒海という危険からの「自由」と「安全」を確保するための戦い、「活動的で自由」な「生活」を日々送り「実りを結ぶ」ための戦い、これを人類は次世代へと橋渡しすることによって、死により有限となる個人の生を神のような無限に近づけることができる。この普遍的な人類のモラルを次(子ども)とその次(孫)の世代へと受け継いでいく様を、その「自由」な「三世代の群れ」に見ながらファウストはあの禁句を発し、「俺が地上で送った日々の痕跡はこれで永遠に滅びるわけではない」と続ける。そして「そんな大きな幸福を予感しながら」、彼は個人ファウストの死という「瞬間」を普遍的な「人類そのもの」に止揚できた「最高の」ものとして「楽しむ」。彼は「人性」(Menschheit)を脱いで昇天したイエズス・キリストとは逆に、「人類そのもの」(Menschheit selbst)にまで脱皮した、そしてそれを数百万の人々に新しい国と共に究極の「人類英知」のモラルとして残し、逝った、またはその事業を完成させるために死ななければならなかった。こう書くと不思議に思われる方がいられるかも知れないが、私にはそう解釈するのが自然に思われる。

新しい国にも宮殿が建ち、ファウストはそこに住む主人である。自分ではそう思わなくても、彼は立派な建国の人であり、果たして支配者という形だけが残るであろうか。それでは「思い上がり」を捨て、支配・被支配の体制をなくしたはずなのに、「自由な土地に自由な(精神の)民(Volk, 人々の集団)」と共に留ま」ということは自己矛盾であろう。少数の支配者にたいする「民」の »Volk«<sup>79</sup>を、全く自由な「人々の集団」にするため、ファウスト個人は死ななければならない。そのことを彼は熟知しているからこそ、「俺は留まりたいものだ」(möcht' ... ich stehn)と接続法第2式で、非現実的な願望として述べている。そういう視点から次の言葉、

「そういう瞬間になら、俺はこう言っても良いだろう」(dürft' ich sagen)を読めば、ただ単に「これで自分の目的が達成できただろうか」という疑惑の接続法第2式だけでなく、自ら死を招くという悲痛な感情が込められているように思われる。もちろんこれは自殺ではなく、自然(または神の招魂による)死を自らの意思で迎え入れる「瞬間」で、そして彼は次にあの禁句を発し、これまでの不断の活動を止める。「聖ヨハネの福音」第12章第23-4節にはこうある<sup>80</sup>。

23 イエズスはそこで彼らに答えて、言った。人間の息子が変容(verkleret)される時が来た。 / 24 まことに、まことに私はお前たちに言う。その麦の粒が地中に落ち、そして死ぬということがないなら、それ一つだけのままだ。しかし、そこでそれが死ぬと、それは多くの実を結ぶ(so bringets viel fruchte)。

キリスト教の国ドイツに生まれ育ち、活躍したゲーテが聖書のこの箇所を知っていたこと、これには疑いを入れる余地がない。地上に「多くの実を結ぶ」ことができる(fruchtbar)ために、イエズスがそれまでまもっていた「人性」(Menschheit)を脱ぎ「変容」したように、ファウストは「人類(Menschheit)そのもの」をまとい、自己を止揚し、この世を去ろうとしたのだろう。ちなみに彼の名前はラテン語の »faustus« に由来し、「幸福をもたらす」(Glück bringend)という意味で<sup>81</sup>、ゲーテの『ファウスト』は、「何百万もの人」に新しい国と共に与えた「究極の人間英知」を、私たち人類にも残したといえよう。契約により彼の魂をメフィストは手に入れようとするが、普遍の域に達した彼のそれは悪魔ごときの手には負えないものであろう。なぜならこれは、メフィストが「この硬い食べ物を何千年も噛んで」きたが、噛み切れず、飲み込めない代物にまで止揚されてしまったからである。こう考えると、ファウストの魂を奪って見せると神の前で豪語したメフィスト・フェレスに、言われた次の言葉が良く分かる<sup>82</sup>。

彼が地上で生きているかぎり、 315

その間、お前がどうしようと許そう。

(中略)

しかし、恥じ入って、お前はこう告白するに違いない。 327

良い人間は、どんな暗い衝動に駆られても、

正しい道をどうも知っているようだ、と。

この神の予測した言葉は、ファウストの創った「お前」という新しい国とモラル、そして彼個人の普遍的「人類そのもの」への止揚によって実現され、メフィストは独り相撲で彼にも赤恥をかかされた、そういうことになる。

## おわりに

これを書く切っ掛けになったのは、「はじめに」述べたように、あの JR の脱線事故であった。ゲートのファウストは、自由な人間に豊かな「実を結ぶ」可能性を託し、「俺が地上で送った日々の痕跡はこれで永遠に滅びるわけではない」と予感しながら、逝った。そして約 170 年後の西日本という地にある JR は、若人の運転士を自由とはほど遠い機械の歯車にしようとして、「日勤教育」で逆に彼の心にトラウマを植えつけ、あの海の波が返した後のように惨憺たる「不毛」を残してしまった。事故調査委員会の報告によれば「事故現場のカーブにさしかかる直前の 40 秒間、約 1.4 キロメートルにわたりブレーキ操作をした記録がない」<sup>83</sup>。そしてこの「空白の 40 秒」間を、ある運転士は「伊丹駅を発車後、高見運転士は車掌にオーバーランの『過少申告』を依頼した。車掌が総合指令と無線でやりとりするのに聴き入り、目の前の景色が目に入らなくなっていたのではないか」と推測している<sup>84</sup>。これには肯けよう。但し、「目の前の景色が目に」という表現では、同じ「目」が二回も繰り返され、目ざわりであるため、「車外の景色が目に入らなくなっていた」に訂正したい。では彼の目に映し出されていたものは何か、これをトラウマという「心の傷」による、あの「日勤教育」と「月額 10 万円の乗務手当不支給」<sup>85</sup>という地獄絵図だったとすれば、あの推測に十分肯けよう。フォンターネの「ジョン・メイナード」にもなれる可能性を持っていたこの若者は、アウフパウの注が史実としたルター・フラーのように多くの乗客と共に逝った。そして、ほぼ同時刻に現場の直近を走行中、黄信号と事故による砂煙を見つけた特急の運転士は自らの判断で電車を停止させ、二重衝突を防いだ<sup>86</sup>。彼はマンの小説にあったように、「その男が我々みんなを救ったのだ」と、そのニュースに接した乗客たちをホッと「安心」させたであろう。

ATS 設置問題だけに限ると、それは矮小化につながる恐れがあると、「はじめに」書いたが、この「おわりに」までの間に、その不安が的中した。既設のそれは図面どおりの場所に設置されていず、また列車のスピードに対する反応値が誤って設定されていたものも発見された。それが訂正されても、私の不安はすべて解消するわけではない。機械にも寿命があり、また誤作動もあるため、人間の弱点を補完してくれる機械に頼るのではなく、あくまでも人間が主人公であることを忘れず、それを点検・修理・取り替えるという機械との相互関係が重要である。費用節約のためか、それをこれまで怠ってきたことが、今回の事故に伴って発見されたようであるが、JR の利益優先体質がそうさせていたのだろう。そういう体質を変革するために最も重要なことは、こうなる。「自由な職場で、自由な仲間と共に働き、実りを結ぶ」ためには、組織や人間は有機的につながっていてこそ本来の働きをし、さらにそこから新しい改良や創造も生まれてくるのだから、機械の歯車のようにバラバラにしないこと、これを最後に再度強調してこの論文を終えたい。



注

1. 2005 年 5 月 5 日付け朝日新聞、参照
2. 2005 年 4 月 29 日, 5 月 2 日, 11 月 10 日付け朝日新聞、参照。5 月 2 日付けの記事の一部を紹介すると、こうある。「反省文を書かされたり、草むしりや窓ふきをやらされたりする」。
3. 2005 年 4 月 29 日付け朝日新聞、参照。この一部を次に紹介してみよう。男性に対する日勤教育では、「なぜ今回列車を遅らせたのか」など 1 日に 7 本の課題についてリポートを書かされていた。書いた分量が少ないと「給料をもらって勉強しているのでしょう」と助役に「いやみ」を言われたという。3 日間の日勤教育の翌日、休暇を取り、首をつった。(中略) 大阪高裁に控訴している父親は今回の事故について「運転士がおどとした気持ちでなく、安全運転に専念できる職場環境が必要だ」と話す。
4. 医学用語で、マライ諸島の住民のもとで発見された、躁状態で他人に危害を加える突発性の精神障害。Amok fahren で、「アモクにかかったように凶暴な運転をする」という言い回しがドイツ語にはある。
5. 2005 年 5 月 6 日付け朝日新聞、参照
6. 同上、参照。
7. 長澤規矩編『携帯新漢和中辞典』三省堂、昭和 44 年第一刷発行、第 32 刷。
8. 西尾・岩淵・水谷編『国語辞典』岩波書店、1985 年 11 月 1 日、第 3 版第 9 刷。
9. この官吏は「内閣法」の第 18 条で置かれ、その任務は同法の第 12 条第 2 項第 6 号で規定されている。今年になって外相の私的「対外情報機能強化に関する懇談会」が、英国の秘密情報機関「SIS」を念頭に「特殊な対外情報機関」を外相の下に設置するよう報告書をまとめ、自衛隊でも約 600 人の「中央情報隊」を新設する方針を固めた(以上、2005 年 8 月 25 日前後の朝日新聞)というように、この面であわただしい動きが出ている。
10. シンチンゲル・山本・南原編『現代独和辞典』三修社、東京、1980。
11. G. Wahrig *Deutsches Wörterbuch* Der Bertelsmann Lexikon Verl. 1991.
12. *Goethes Werke*, Christian Wegner Verl., Hamburg 1969. B. 1. S. 142.
13. 参照。山田四郎『ドイツ詩必携』鳥影社、2001 年初版、172-184 頁。さらに注 7 で挙げた同書には、この詩の多くの研究書を参考文献として掲げた注が S. 533 にある。
14. 注 12 の同掲書、S. 534. この全文を紹介すると、While the indispensable syllable *e* in *Vögelein* and *Walde* makes the sixth line a lilting lullaby.
15. この順番は矛盾していると思われる。なぜなら、その経では子どもの定義が「一つや二つや三つや四つ、十よりうちの幼子」となっているが、この年齢はまだ母親の方が恋しい年頃であるからである。生まれたてのベビーは、まず母の胸に抱かれて、乳房を吸い、猿のような容貌から人間らしいものになり、ヨチヨチ歩きから外界の自然に興味を示し、そこで遊び、帰ってきて「安心」するのは自分を迎えてくれる母を見たときであろう。つまり前述したように、家に女がいること、これが元来の「安心」の意味であり、男が外に出て田で力をふるうことができる「安心」に通じる。この年齢の幼子としては、まず「母恋し」であろう。子どもが独立していくプロセスを「ちちばなれ」というが、その「ちち」はまず「乳」で、次が思春期の「父」であろう。それゆえ 4 歳の子が積む石は「ひとつ積んでは母のため」となるのが自然であろう。こう考えると、この経は自然と矛盾する。すると結論は、この経が作られたのは男が女を支配する社会になってから、ということになる。
16. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen* in 3 Bdn. Akademie Verlag Berlin 1989. B. 1. S. 154.
17. しかし、良い辞書と思われる白水社の『和独辞典』(1982 年、第 12 刷)でもこの語に対しては紹介されていない。また『独和辞典』(郁文堂、2003 年、第 2 版第 9 刷)でも事情は同じで、訳語は「保護されている、安全な」が紹介されているに止まっている。例文としては、»hier bin ich geborgen ここなら安全だ；sie fühlt (weiß) sich bei ihm geborgen 彼女は彼のそばにいと安心していられる«, この 2 つを載せている。この後者の例では「安心」という訳語が表れるが、fühlen「感ずる」という動詞を使っているから「安心」という訳にしているのだろう。前例のように sein 動詞を使っても、やはり主観的・情緒の意味で「安心」という意味である。これは後述するトーマス・マンの作品で明ら

かになるう。

18. アップラウト (Ablaut) は言語学の用語で、同一の語幹または語根の中で起こる規則的な母音交替のことで、例えば英語の「歌う」という動詞の 3 基本形は sing - sang - sung で、名詞は song となり、それが同類であることを表している。ドイツ語の動詞のそれは singen - sang - gesungen である。
19. 注 16 の同掲書, B. 1. S. 232.
20. ドイツが東西に分かれ、対立関係にあったとき築かれた「ベルリンの壁」はこの良い例であろう。
21. J. u. W. Grimm *Deutsches Wörterbuch*. S. Hirzel Verl. Leipzig 1885. B. 1. S. 1508.
22. Thomas Mann, *Frühe Erzählungen*, S. Fischer Verl., 1. Aufl., Hamburg 1981. S. 530. 以下これからの引用は FA. と略し、頁数を次に記す。
23. 岩波文庫の『トオマス・マン短編集』, 実吉捷郎訳 (昭和 28 年 3 月 5 日, 初版第 1 刷, 48 年 12 月 20 日, 第 21 刷発行)。ここではこう訳されている。「前の日に一等の車房を予約 (sichert) してしまった。だから、もう大丈夫 (geborgen) のだ」。これは私の訳と違う。実吉さんの訳は「予約」で拙訳は「確保」、彼の「大丈夫」に対して私の「安心」である。この「大丈夫」は広辞苑によれば「あぶなげのないさま。しっかりしているさま。堅固なさま」で、これは客観的であっても、主観的・情緒的な意味ではない。つまり実吉氏のこの訳は「安心」ではなく「安全」の方の意味で、すると「予約」と訳された sichern の「安全」と重なることになるう。つまり誤訳である。
24. FA. S. 531.
25. Ebda.
26. Ebda.
27. FA. S. 531f.
28. この原文は, Er wandelt sicher in seinen Gamaschen となっている。この »sicher« はガマッシュを巻いていることにより、物理的に「安全」であること、さらにそれが特別な階層であることを他人に示してくれるため、社会的に「安全」であること、この両面を表している。
29. FA. S. 531.
30. FA. S. 533. 下線部の »Schwanz« は「尻尾」という意味で、俗語では「ペニス」として使われる。相手を罵倒するような俗語はもちろん前者ではなく、後者の意味である。Pons (*Wörterbuch der deutschen Umgangssprache*, Hrsg. von Dr. Heinz Küpler. Ernst Klett Verl. Stuttgart 1990.) の説明では、この言葉は「19 世紀から使われだし, Schwanz (尻尾) = Penis (ペニス) = Mann (男)」とあり、原文の語は「猿のチンポコ野郎」となるう。マンはこの言葉を聞いて驚き、こう続けている。その驚きを正確にするため、まず原文を次に ( ) 内に拙訳を紹介しよう。

Ein Herrenausdruck, ein Reiter- und Kavaliersausdruck, herztstärkend anzuhören.

(主人の言葉だ、騎兵の、ホモ・ダチの言葉で、これを聞くには、よほど心臓が強くなければ、聞くに耐えられない言葉だ。)

この訳の「主人」は奴隷や使用人に対する主人で、この主人は彼らを貶める言葉で罵る。それがこの言葉である。次の「騎兵」は馬を乗りまわす荒くれ男で、彼らも極端な罵声を浴びせる。この原語の »Reiter« が、同じく「馬に乗る男」である »Kavalier« を呼び起こしたのであろう。これは普通「騎士」と訳されるが、中世の騎士は戦場では「武」に秀で、宮廷では高貴な女性の「愛」を得ようと努める礼儀正しい武者であった。日本では文武両道の統一が、西洋では「武」と「愛」の止揚が求められた。こういう騎士を指して、マンは »Kavalier« と言っているのではない。彼は Pons の辞書にあるように「ホモ (売春男) の高貴で金持ちの男友 ダチ」(reicher, vornehmer Freund des männlichen Prostituierten) の意味で使っている。この「ホモ・ダチ」という言葉がをどういう状況で使われるのか (極端な語は場合によって価値が転換するため) 分からないが、とにかく国家という列車を運行する車掌に対する言葉でないことは確かであり、「よほど心臓が強くなければ、聞くに堪

えられない言葉である」ことは確かである。

31. FA. S. 533f.
32. Vgl. FA. S. 535.
33. FA. S. 535f.
34. FA. S. 536.
35. FA. S. 537.
36. FA. S. 537.
37. Ebda.
38. Ebda.
39. Vgl., FA. S. 539.
40. Ebda.
41. FA. S. 539f.
42. FA. S. 540.
43. 例えば 2005 年 6 月 28 日付けで朝日新聞の文芸欄では、この事故を扱った雑誌論文が紹介されている。「現代 7 月号」の柳田邦男のものは、「91 年の信楽高原鉄道事故でも、安全軽視の過ちを認めず社会的責任を回避しようとしてきた経営者たちは、事故原因を運転士のヒューマンエラーに帰そうと必死になる」と、「世界 7 月号」の「匿名座談会」からは、「日勤教育」だけではない。「ヒヤリハット(ヒヤリとしたりハットとしたケース)」を見つけるのは、安全のためではない。実際には「社員をチェックするため」に「ヒヤリハットを一日三件見つけるのが、係長のノルマ」となっており、しかも「見習い運転士を教える指導操縦者」から組合員のベテランが排除され、「運転士経験三年ぐらいの、二六、七歳の運転士に指導させている」。この異常な労務管理は、国鉄民営化に端を発すると、労働現場での恐怖政治の実態を紹介している。
- 新聞と雑誌の棲み分けもあるだろうが、文芸欄での紹介で済ますだけでなく、もっと突っ込んだ深い内容の紙面でジャーナリズム魂を見せてもらいたい。
44. FA. S. 538f.
45. 原文で楽しみたいという方は、フォンターネの全集には必ず載っていますから、ぜひそれで読んでください。以下それを紹介します。Theodor Fontane *Gedichte* 1. Hrsg. v. Joachim Krueger u. Anita Golz. Aufbau-Verl. 1989. 1. Aufl. S. 168f. Theodor Fontane *Werke, Schriften und Briefe*. Abteilung 1. 6. B. Carl Hanser Verl. München. 1964. S. 287f. *Fontanes Werke* in 5 Bdn. Aufbau-Verlag. Berlin u. Weimar. 1986. S. 47. „Gedichte fürs Gedächtnis“ DVA Stuttgart 9. Aufl. 2000. S. 130. ドイツ人の朗読で楽しみたい方には次の CD を紹介します。„Die Stimmen, Die Rufenden - Akzente in Balladen“ Hrsg. v. Angela di Ciriaco-Sussdorff. Random House Audio. 2004.
46. Vgl., Theodor Fontane *Gedichte* 1. Hrsg. v. Joachim Krueger u. Anita Golz. Aufbau-Verl. 1989. 1. Aufl. S. 554. この詩行に付けられた注はこうである。「これは新約聖書のヨハネの黙示録 2, 10 の箇所を思い出させる。死ぬまで忠実であれ、そうしたら私はお前に命 (Leben) の冠 (Krone) を授けよう」。この Leben という単語を一語で訳せる日本語はない。この箇所は「主である私が 命じたように全うした人生」が Leben で、それを証明する「天上の王冠」が Krone である。つまり、神の意にかなない、天に召された、ということである。もちろんフォンターネのジョン・メイナードは操舵手としての社会的任務に「忠実」であったのであり、これが同時に神に意に叶うということである。
47. Vgl. Theodor Fontane *Werke, Schriften und Briefe* Abteilung 1. 6. Bd. Carl Hanser Verl. München, 2. Aufl. Hrsg. v. Walter Keitel u. Helmuth Nürnberger. 1978. S. 1068.
48. 注 46 の同掲書 552 頁参照。
49. 注 45 で紹介したアップバウ版、およびハンザー版の注を参照。
50. 以下の引用は第一幕第一場の詩行 136 から 160. Schiller *Werke*, Nationalausgabe, Weimar 1948ff. B. 10. S. 138f. 本書からの引用は NA. と略し、頁数のみを次に記す。

51. *Handwörterbuch der deutschen Sprache* Dr. Daniel Sanders. Otto Wigand Verl. Leipzig. 1878. S. 199.
52. 「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第 110 号 2004 年発行. 139 頁からを参照.
53. NA. S. S. 267.
54. Goethes Werke, Christian Wegner Verl. In 14 Bdn. Hamburg 1972. B. 3. S. 34. 以後の本書からの引用は HA と訳し、頁数を次に記す. 拙訳には読者が他の版を参照されることも考慮し、その詩行が何行目のものかを示す数字を 5 詩行ごとに添えた.
55. HA. S. 57. 引用の次の ( ) 内の数字は何詩行目かを示す. 以下、このように記す.
56. HA. S. 20.
57. HA. S. 59.
58. 『ファウスト』大山定一訳, 人文書院, 昭和 35 年初版発行, 重版 43 年, 55 頁. 他の訳も次に挙げるが、引用に続いて ( ) 内に訳者名, 出版社, 頁数だけを記す. 「最後には人類同様、己も滅んで行こうと思うのだ」(高橋義孝訳, 新潮文庫, 120 頁). 「ついには人類もろとも砕け散ろう」(小西悟訳, 大月書店, 65 頁). 「そして遂には人類の破滅とともに俺もまた砕け散るのだ」(柴田翔訳, 講談社, 104 頁).
59. J. u. W. Grimm *Deutsches Wörterbuch*. S. Hirzel Verl. Leipzig 1885. B. 6. S. 2078. 以下のこの単語に関する引用はこの頁からのものである.
60. Vgl., HA. S. 514. この »Menschheit« に対する注があり, 「現来は人間の本質, それから人間全体して使われるようになったが, ゲーテでは主に前者の意味」とある.
61. HA. S. 59.
62. HA. S. 17.
63. Vgl., 「人間努力するかぎり, 過ちを犯すものだ」(317), HA. S. 18.
64. HA. S. 57.
65. この段落のここまでは第 10212-22 詩行, HA. S. 308f. を参照. 人類のこれまでの努力は決して「不毛」ではなく, 子孫を残し, 文化財をのこしてきた, そう思われるかもしれないが, ファウストがここで言っているのは, 後者はこれまで繰り返されてきた戦争で毎回瓦礫の山となり, 前者の子孫も限られた命の人間で, しかも無益な殺戮と破壊をいまだに止めることもできない小市民の人間のままで, 単なる誕生と死の繰り返しでしかないということである.
66. HA. S. 308.
67. 神は 6 日で地球, 宇宙の星, 陸と海の生物そして人間を創られ, 7 日目に休まれた, そう聖書の創世記には書かれている. ゲーテの時代はそれらの創造が, ファウストの台詞にあるように, 数千年前にそれがあったと考えられていたようだ. ダーウィン (Charles Darwin 1809-82) の『種の起源 (1859)』が出版されたころも, 人々はイエズス・キリスト誕生を基点として, その前を創世後の年 (Anno mundi, »Anno« はラテン語で「年」, »mundi« は「世界創造」), その後をキリスト誕生後の年 (Anno Cristi) とし, 前の年数は『旧約聖書』に出てくるアダムとイヴ, ノアなどの人々の年齢を足し, 後ののは実際の歴史年により, その両者を加えて, 当時は天地と人間 (アダム, ヘブル語で「人間」) の創造後約 6 千年と考えていた. それに対して, ダーウィンは地球の年を 3 億年と計算した (aus Jostein Gaarders *Sofies Welt*. Hanser Verl. 1998. S. 484.). 現在では, 地球の年は約 50 から 60 億年前 (aus *Brockhaus* in 12 Bdn. Wiesbaden 1979. B. 7. S. 500.), 人類の誕生は約 30 万年前 (aus *Wunderbarer Planet*. B. Brown u. L. Morgan. aus dem Engl. v. H. Schmincke übers. Vgs. S. 210.) とされる.
68. Vgl., Verse 10227-33. HA. S. 309.
69. HA. S. 348.
70. HA. S. 17. 文中の「清澄」(Klarheit) は, あれこれ過ちを犯しながら問題を解こうと努力しているファウストを, 明確な (klar) 解答の発見へと導いてやることと, 地上という暗闇から明るい (klar)

天上に召すということの二つが掛けられている。

71. HA. S. 144.
72. グレートヘン劇は悲しくこそあれ、美しくはないのではないか。それゆえファウストがそれに対して「このままでいてくれ、お前は実にすばらしい」(拙訳)、または「まあ、待て、おまえはじつに美しい」(大山訳、人文書院、345頁)と言うのはおかしいではないか、そう思われる方もいるだろう。しかし、ここでの「すばらしい」とか「美しい」という表現は、例えば天国と地獄の絵画を思い浮かべていただければ分かるように、どちらも鑑賞して、そう言えよう。これはアリストートルスの『詩学』で論じられたカタルシスにも通ずるもので、ゲーテはシラーと共に悲劇的美についても議論を深めていた。それゆえ、ファウストは「全人類に課せられたもの」の「最高のものと最深のものを掴」もうとしていたのだから、グレートヘンの悲劇的最後に対しても当然あの言葉を発しても良い。
73. HA. S. 147.
74. HA. S. 148.
75. HA. S. 148.
76. HA. S. 149.
77. HA. S. 17.
78. Verg., Vers 11151f. u. 11253f. HA. S. 336 u. 339.
79. 注 51 と同じ辞書の 949 頁。ここでは »Volk« を 3) で「集合的に、人々 (Leute)」とし、その a) で「非常に多くの人々」(eine große Menge Leute) と説明している。拙訳の「人々の集団」はその意味である。これに対して 6) で「国民 (Nation) の中の大きな集団、(中略) 高等教育を受けず、多かれ少なかれ特権的である地位につけない大きな集団」と説明している、こういう意味で私は「民」と訳した。
80. Biblia. Die Luther-Bibel von 1534. B. 2. das Neue Testament S. XXIX. この原本の頁表記は、植字工のミスによるものか、明らかに間違っている。この該当頁は見開きの右側の頁になるが、そこには »XXIX.« (29) と印刷されている。その見開きの左には頁数が振られていず、その裏頁に »LXVIII.« (68) とあり、この該当頁の裏 (見開きの左) は同様に頁数なしで、その右側の頁に »LXX.« (70) と印刷されている。この時代は左側頁を一つと数えなかったらしい。以上で、この該当頁は »LXIX.« (69) 頁目とすべきところを、植字工が最初の »L« を »X« と組んでしまったようだ。  
 尚この原本には節数も省いてあるので、1893 年出版のルター訳聖書に従って、本文ではそれを付した。どうして約 360 年の隔たりがある初版本から引用するのかと不思議に思われるかもしれないが、ゲーテと私が共に接することのできるものは年代的にこれしかなかったからである。  
 この初版本のルター訳の聖書はヴァイマルのアナ・アマーリア・図書館にある。不幸なことに、この図書館は 2004 年の火事 (新しく建設される館に引越しする予定であった直前に、漏電の火により多くの古い旅行記が失われたと、2005 年 3 月にイエーナで聞いた) で多くの貴重な蔵書を消失した。その再建のための資金を広く募り、多くの個人と企業がそれに応え、もちろんその図書館も自助努力をしたのだろう。その結果が貴重な蔵書の中から、この初版本をファクシミリ版で資金集めのため売り出すことになったのであろう。それを新しく入手したものと以前に 360 年ほど出版時期がずれる両聖書の正書法は随分違いがあるが、意味は同じと思う。
81. Vgl., Duden *Familiennamen*, Dudenverl. Mannheim 2000. S. 232.
82. HA. S. 18.
83. 2005 年 9 月 6 日付け朝日新聞記事。
84. 同上。
85. 2005 年 4 月 29 日付け朝日新聞記事。
86. 2005 年 5 月 2 日付け朝日新聞記事、参照。